

京 都 府	
<p>1・14 京都後素協会、京都倶楽部に月次会を開く（古画の時代展観と新画の絵合を行う、絵合は公開では最初、その優劣を投票で判定する）。 京都美術協会雑誌 67</p> <p>1・21 日本南画協会の月次会と新年宴会を京都倶楽部に催す。 日出 1・22</p> <p>1・23 京都表具協会、萬花園に発会式を挙げる。 日出 1・25</p> <p>2・9 2代川島甚兵衛、帝室技芸員を拝命。 京都美術協会雑誌 69</p> <p>2・一 市美術工芸学校長 今泉雄作退職、後任決定まで京都府属上田正当が代理。 同上</p> <p>2・一 京都陶磁器商工同業組合有志者、陶磁器描画競技会を設立（以後毎月同会を開催、褒賞授与を行う。会長藤江永孝、幹事清水六兵衛・小川文斎、審査員、清風与平・伊東陶山・三浦竹泉・吉岡吉兵衛・宮川治助・酒見外治・田村宗兵衛・加藤暢山ら）。 日出 9・18</p> <p>4・1～5・10 第4回新古美術品展、⁽¹⁾ 岡崎に開催。 京都美術協会雑誌 72</p> <p>4・11～5・15 京都博覧協会、婦人製品博を御苑内旧博覧会場に開催。 京都博覧会沿革誌</p> <p>4・12～6・12 全国漆器大共進会を元第4回内国勸業博覧会館に開催（主催、京都漆工会、協賛は市、6・30 授賞式）。 京都美術協会雑誌 73</p> <p>4・一 彫金家 正阿弥勝義、岡山から入洛、寺町五条上ルに在住。 名家歴訪録</p> <p>5・一 北野神社楼門落成式を挙げる。 日出 2・18</p> <p>6・2 京都美術協会、第2回美術功労賞授与式を市議事堂に挙げる（内貴甚三郎ら表彰）。 京都美術協会雑誌 73</p> <p>7・27 上田正当、市美術工芸学校の校長となる。 市立美工沿革略</p> <p>8・一 富岡鉄斎、黒谷光明寺方丈書院襖と壁張に水墨「幽谷絶壁図」揮毫。 鉄斎</p> <p>9・18 京都蒔絵青年会、発会式を京都市美術工芸学校に挙げる。 日出 9・2</p> <p>9・28 日本仏教真美協会第1回建仁寺町に開催（『日本仏教真美偉観』発行につき協議、のち『真美大観』として刊行）。 日出 10・1</p> <p>9・一 神阪雪佳、野村成之にかわり、『京都美術協会雑誌』の編輯者となる。 京都美術協会雑誌 75</p> <p>10・5 市美術工芸学校、あらたに評議委員4人と商議員37人を囑託（評議員：今泉雄作、雨森菊太郎、西村治兵衛、新任の商議員：丹羽圭介、今尾景年、鈴木松年、望月玉泉、内海吉堂、富田幸七、清風与平、吉田理助、鳥居喜兵衛、伊達虎</p>	<p>一、小林久次郎、山本利兵衛、秦蔵六）。 市立美工沿革略</p> <p>10・14 西陣織物同業組合設立（事務所を上京区元誓願寺通黒門東入ルに設置）。西陣織物誌記</p> <p>10・15 藤江永孝、農商務省から清国窯業の実状調査を囑託され、この日出発（12・21 帰国、この結果、支那呉須の研究が進み、その製造が可能となる）。 藤江永孝伝</p> <p>10・15 京都漆工会の青年塗師部、第1回競技会を裏寺町蛸薬師正覚寺に開催（出品は柳下地、蠟虫、木地、審査員：岡田表寛、岩村源之助、小杉徳兵衛）。 日出 10・17</p> <p>10・15 竹内棲鳳の「春雨」、第5回日本絵画協会共進会展、日本美術展覧会連合展で銅牌をうける。 日本美術院史</p> <p>10・17 第2回後素青年会秋季大会、京都倶楽部に開く（出品40余点、金子静枝、山元春挙が講演。審査長：富岡鉄斎、審査員、森川曾文、谷口香嶺、都路華香、第1席「荒原暮色之図」千種掃雲、第2席「秋曙之図」田南松雨、第3席「暮靄之図」川北霞峰ら）。 京都美術協会雑誌 77</p> <p>10・23 日本南画協会、第3次大会開催（富岡鉄斎「万壑松風」「太秦牛祭」など）。 同上</p> <p>11・17 後素協会、京都倶楽部で絵合を行う（出品画 120余点、正会員が判定者となり投票で結果を定める）。 日出 11・17</p> <p>この年</p> <p>▷ 熊本の間部時雄、京都に移住。（市立染織学校、のち京都高等工芸学校で学ぶ）。 京都洋画の黎明期</p> <p>▷ 岸竹堂「月下猫児」製作。 原色明治百年美術館</p> <p>▷ 川村曼舟、山元春挙の門に入る。 日本美術年鑑 昭18</p>

参 考	日 本
<p>(1)第4回新古美術品展覧会 受賞者</p> <p>1等金牌、「木彫小供遊戯置物」堀川壽吉郎、「幽谷織有職裂地模様女帯地」川畑又右衛門、「縮緬友禅草花模様染」廣岡 伊兵衛、「刺繡深林ノ図」屏風 飯田新七</p> <p>2等賞銀牌、「秋風人物ノ図」都路華香、「柏鹿伴養ノ図」森川曾文、「湖上朧月ノ図」望月玉泉、「菜葉雲雀ノ図」今尾景年、「空山旅思ノ図」山元春挙、「仏画達留摩ノ図」鈴木松年、「木彫源氏青海波置物」堀川 壽吉郎、「縞珍織豊公因ミ模様女帯地」鳥居 栄太郎、「縞珍織宇津山模様女帯地」川島織物 合資会社、「縞珍織色紙模様女帯地」西村治兵衛、「縞珍織模様女帯地」下村庄兵衛、「縮緬友禅色紙模様染」西村 治兵衛、「縮緬友禅四季草花模様染」川畑 又右衛門、「箕面瀑布刺繡」渡辺伝吉、「牡丹蝶模様菱形花瓶」伊東陶山、「四分一銀洲浜形雪田玉川画香盒」正阿 弥勝義、「義家歌意蒔絵小硯箱」中村 尚吉、「紫檀製平卓」宮川末吉、「大嶋桐製文壺」駒沢利斎</p> <p>3等賞銅牌、「花鳥ノ図」梅村景山、「顯家ノ妻ノ図」藤井春水、「松鶴ノ図」内海吉堂、「重衛朗吟ノ図」上村松園、「昭女長談ノ図」信近春城、「黄昏飢鴉ノ図」山田耕雲、「雨後ノ図」西村秀岳、「鶯ノ図」浅江柳喬、「白鷺雨凌ノ図」望月玉泉、「後赤壁ノ図」奥谷秋石、「松泉清應ノ図」田能村直入、「狙公ノ図」田中一華、「春ノ曙、秋ノ夕暮ノ図対」森雄山、「雪景嵐山ノ図」藤島清蓮、「秋山樵蘆ノ図」川北 霞峰、「春暖ノ図」野田鋤雲、「豊公雄ノ図」沢田兼堂、「駿洲白糸ノ滝」原在泉、「紅葉狩ノ図」桜井忠剛、「深林ノ図」印藤真楯、「女官束装ノ図」伊藤快彦、「冬ノ日ノ図」橋本勲、「知恩院本堂ノ図」大八木常正、「洋鶉レグホンノ置物」内藤 光石、「金比羅王像置物」森嶋千代、「狎ノ置物」森鳳聲、「優網織女帯地」矢代庄兵衛、「厚板二重間道扶桑端模様」金田忠兵衛、「倭錦女帯地」熊谷市兵衛、「明珍織 両面松ニ浪裏海草模様帯地」浜部儀八郎、「縞珍織白茶 地有職桐ニ鳳凰模様帯地」市田文次郎、「京厚錦籠目ニ 牡丹模様帯地」浜部 儀八郎、「京厚錦籠目ニ牡丹模様女帯地」喜多川平八、「裂地白紹唐織花筏模様」中村半兵衛、「縮緬友仙川瀬水車模様」野口 安左衛門、「初着男物松竹梅模様」津田常七、「塩瀬友仙壽老山水三幅対掛物」安田太七、「縮緬友仙」内藤徳兵衛、「加藤清正ノ額」安田新造、「古代彫花瓶」谷口長次郎、「淡彩羅漢画茶碗」三浦竹泉、「金襴手鉢」治村松雨、「銅七宝菊模様香爐」林小伝次、「銅青地花鳥模様花瓶」平野吉兵衛、「鳥銅地金銀刻箱菓玉模様巻蓆入」井上 吉兵衛、「純銀菊形湯沸」中村竹次郎、「春秋扇散絵蒔ノ書棚」三上治三郎、「木製蓆盆各種」大伴源之助、「煤竹張黒眞塗雪吹」黒田正玄、「桑製古代式机」宮崎平七、「黒檀製平卓」高木卯之助、「紫檀製机」長谷川竹次郎、「桑製棚」西村巳之助、「桐李製文壺硯箱」松本彌吉。 京都美術協会雑誌 72</p>	<p>1・一 小堀鞆音門下の安田靫彦・磯田長秋・山川永雅・小山栄達ら紫紅会を設立。</p> <p>2・2 金工 加納夏雄没（文政10生、享年72）。</p> <p>3・25～5・30 明治美術会創立10周年記念展覧会、上野に開催（浅井忠「冬枯」、川村清雄「画室」、同会はこれを最後として振わなかった）。</p> <p>3・29 東京美術学校紛擾、校長岡倉天心辞職を命じられる（同日、高嶺秀夫後任となる）、彼に殉じて教授橋本雅邦、助教横山大観、同下村観山ら17人辞職。</p> <p>4・11 銅版画家 エドアルド=キョソナー、東京で没（1833年生、享年65）。</p> <p>4・28 黒田清輝、東京美術学校教授となる。（7・11 浅井忠・長沼守敬教授となる）。</p> <p>5・24 画家 菅原白龍没（天保4生、享年66）。</p> <p>6・26 画家 野口幽谷没（文政8生、享年74）。</p> <p>6・一 日本画会創立第1回展開催、末松謙澄を会頭とし、新旧両派の間を目標とする集団。</p> <p>9・1 日本画家 田崎草雲没（文化12生、享年84）。</p> <p>10・5～11・20 白馬会第3回展(上野)、黒田清輝「昔語り」「父の像」、湯浅一郎「漁夫晚帰」など。</p> <p>10・15 岡倉天心、橋本雅邦、横山大観ら、日本美術院を創立（7・1 創設趣旨を発表）、この日開院式、この月、『日本美術』を創刊（～大正5・12=198号）。</p> <p>10・15 日本絵画協会・日本美術院連合第5回共進会（日本美術院～11月）、大観「屈原」、観山「閻維」、春草「武蔵野」など。</p> <p>12・18 高村光雲作「西郷隆盛銅像」除幕式（上野公園）。</p>

京	都	府
<p>1・一 市立陶磁器試験所、はじめて伝習生徒の入学を許可(本市当業者の子弟を集め、卒業後は、自家の製造主ないし工場監督者となる者の養成が主眼)。日本近世窯業史 3、藤江永孝伝</p> <p>1・一 東本願寺が南京に金陵東文学堂を創設し、北方心泉を主任とする。書道全集 25</p> <p>2・24 貴族院、美術・学理応用の工芸技術を教授する官立学校を京都に設立の建議案を第13回議会で可決(衆議院も)。実業教育50年史</p> <p>3・7 第1回京都陶磁器奨励会、京都市立陶磁器試験所に開催(同会は描画競技会の発展拡大したもの。会長、藤江永孝)。京都美術協会雑誌 82</p> <p>3・20 日本仏教真美協会、『真美大観』第1号を発行(事務所を建仁寺禅居庵におく)。京都美術協会雑誌 85</p> <p>4・1~5・10 京都博覧協会、全国意匠工芸博を岡崎博覧会場に開催(「先途を制するもの唯夫れ斬新の意匠考按に在り…」という開設趣意を全国に呼びかけ、当時の意匠図案重視の要請にこたえたもの。審査、普通審査員の上に高等審査を囑託して初めて複審査法を用いる)。京都博覧会沿革誌</p> <p>4・1~5・20 第5回新古典美術展覧会、⁽¹⁾岡崎美術館に開催(竹内棲鳳が鑑査員と審査員をつとめ、山元春挙が鑑査員、菊池芳文が審査員となる)。京都美術協会雑誌 84</p> <p>5・1 山元春挙、市美術工芸学校教諭となる。市立美工沿革略</p> <p>5・5~6・8 第2回全国絵画共進会⁽²⁾、御苑内博覧会場に開催(後素協会主催、審査長:山高信雄、審査幹事:金子錦二、審査員:今尾景年、原在泉、望月玉泉。投票によって2等銀印「大塔宮図」都路華香、平均93、「夏のうみへの図」山元春挙、平均87、3等銅印「東坡遊石鐘山図」内海吉堂、平均82、「迦葉哄笑図」仲芳曉、平均79、など)。京都美術協会雑誌 84、日出 5・31</p> <p>5・19 仏画師 高橋一斎の遺墨展覧会、京都倶楽部に開催。絵画叢誌 149</p> <p>6・11 金工 紹美栄祐没(天保10・2・18京都室町生、幼名文次郎)。京都美術協会雑誌 34、97</p> <p>6・19 木彫家 疋田雪洲、根岸昌雲、亀田三喬、森鳳声、田中宗祐、金工、紹美栄祐、秦蔵六、平野吉兵衛、京都彫技会発起人会を京都倶楽部に開催(その他、旭玉山、正阿弥勝義、内貴甚三郎、雨森菊太郎も出席)。京都美術協会雑誌 85</p> <p>6・一 工学士鶴巻鶴一、市立染織学校校長兼教諭となる(明34・6まで)。実業教育50年史、府誌下</p> <p>7・3 上京区第1連合教育会、全国習字筆法奨励会長田賀絲静湖を乾隆小学校に招き習字に関する講習会を開く。日出 7・6</p> <p>7・15 巨勢小石、二条離宮東溜間天井及壁面御用を拜命し、唐草牡丹金砂子雲取り模様を描く。日出 7・24</p>	<p>8・一 機織家 佐倉常七没。京都美術協会雑誌 143</p> <p>8・一 市立陶磁器試験所長藤江永孝、窯業技術研究のためヨーロッパへ留学(明34・8 帰国、その結果まず洋風円窯の築造を奨励、粟田焼を改良、半磁器に清水焼を巧緻純白の質となすなど成果がある)。松風嘉定</p> <p>9・30 市美術工芸学校は規則を改正し、工芸図案科を図案科と改称、漆工科を描金科と改め髹染部を廃した。また各科の修業年限を4年とし、予備科を廃し各科に修業年限2年の専攻科を置く。市立美工沿革略</p> <p>10・11 京都の巴里万国博出品画、京都倶楽部の後素協会月例会別室に陳列(原在泉「春日吻鹿図」、梅村景山「秋畝図」、望月玉泉「鵬養雛図」、鈴木松年「松澗水声」、野沢如洋「夏山夕景図」、前田玉英「雪暎図」、上村松園「母子図」など、景年は東京より直接仏国へ送付、曾文、村松雲外は日本美術協会の買上げ、山元、竹内、谷口は美術館に出陳したため、この日は陳列せず。日出 10・12</p> <p>10・15 第7回日本絵画協会共進会展で「秋萩」鈴木松年、「12ヶ月」竹内棲鳳、銀牌を受ける。日本美術院史</p> <p>10・15 第5回南画協会秋季大会、法然寺などに開催(勝円寺に特別会員の永年、易堂、墨我、琴城、小林卓斎、谷鉄臣らの書、如洋、文嶺、松年、文原の画、正会員の重春塘、富岡鉄斎、田能村直入、前田荷香、谷口露山、内海吉堂などの画を展覧)。日出 10・16</p> <p>10・17 後素青年会第3回展、京都倶楽部に開催(「悉多発心の図」西山翠嶂、「いなかみち」橋本菱華、「渡辺解纜」川北霞峰、「賀波」細野契月、「春雨」川合泉石、「近衛川原月夜愁恨」千種掃雲、「秋寂」田畑秋濤、「紫式部幼時眞壁小窓霞晨」井口華秋ら入選)。日出 10・19</p> <p>10・一 デュリイ(Léon Dury)記念碑落成式、南禅寺畔に挙行。稲畑勝太郎君伝</p> <p>11・1 京都彫技会発会式、京都倶楽部に挙行(会頭、中沢岩太、副会頭、西村治兵衛、幹事、大沢芳太郎、田中宗祐、秦蔵六)。京都美術協会雑誌 90</p> <p>11・5 天竜寺再建開堂式(明29・9・14着工)。日出 11・8</p> <p>11・26 今尾景年中第1回展覧会、京都倶楽部に開催(今尾景年「李白尚齒会図」、梅村景山「海中図」、上田万秋「瑞鳥図」、木島桜谷「喜劍罵良雄図」、野沢如洋「青山淡霽図」)。絵画叢誌 155、日出 11・23</p> <p>12・7 東京美術学校教授黒田清輝、美術工芸に関する調査のため入洛。日出 12・8</p> <p>12・30 南画家 谷口露山没(享年84、西ノ京西王寺に葬る)。京都美術協会雑誌 91、京都名家墳墓録</p>	

参	考	日	本
(1)第5回新古典美術品展	<p>受賞者</p> <p>2等賞、「彫金香合花瓶模様」正阿弥勝義、「瓶懸緋銅鎚起」紹美栄祐、「彫刻置物小原女坐眠」堀川壽吉郎、「白茶地繻織帯地竹模様」清水半兵衛、「陶器花瓶浪に千鳥模様」伊東陶山、「友禪染秋草模様」下村庄兵衛</p> <p>3等賞、「春夜図」菊池芳文、「山水図」田能村直入、「人物図」上村松園、「行旅図」都路華香、「溪間鳴蛙図」森雄山、「洋画景色庭園図」桜井忠剛、「同宮参図」伊藤快彦、「彫刻小原女立姿」森風聲、「同風俗婦人」中谷翫古、「彫刻肌手不動毘沙門像」西川忠三郎、「黒地繻織帯錦木」河那辺喜三郎、「洋服地楓桜」曾和嘉兵衛、「綴れ織更紗」金田忠兵衛、「刺繻額面渡月橋図」熊谷市兵衛、「友仙染扇面四季」同上、「無線友仙染草花」梅田彦太郎、「帛紗友仙染老松に孔雀」川島友次郎、「蒔絵平卓歌意」山本利兵衛、「研出蒔絵文台連歌会図」湯浅久吉、「蒔絵硯箱和泉式部御手洗川歌意」中大路季嗣、「陶器花瓶稲の図」錦光山宗兵衛、「磁製花瓶青華瓷」三浦竹泉、「同草花絵」鶴田次平、「七宝香盆」林小伝次、「同菓子器」権田広助、「銅製銚子排竹式」金谷五郎三郎、「青銅花瓶浪模様」秦蔵六、「書棚加茂川意」宮崎平七、「紫檀天然木台」宮川末吉、「桐製古式文台」駒沢利斎、「唐木胴張平卓」高田留七。京都美術協会雑誌 84</p>	<p>1・1 読売新聞、東洋歴史画題を懸賞募集(坪内逍遙、高山樗牛の間で歴史画論争おこる)。</p> <p>3・一 白馬会絵画研究所を東京溜池の合田清の工房に設置(実技のほか仏語、美術史などを講ずる)。</p> <p>6・2 画家 小坂象堂没(明3生、享年30)「小春」「野辺」など。</p> <p>6・29 画家 長井雲坪没(天保4生、享年67)。</p> <p>6・一 日本画会第2回展。</p> <p>9・一 東京美術学校、塑造科を新設。</p> <p>10・15~11・20 日本絵画協会・日本美術院連合第7回共進会(上野)、大観「夏日四題」、春草「稲田姫」などに無線描法の新しい手法示す。</p> <p>10・一 白馬会第4回展。</p> <p>10・一 日本美術協会秋季展(彫刻と工芸のみ)。</p> <p>10・一 浅井忠、西洋画研究のため満2年、仏国留学を命ぜらる。</p> <p>12・26 洋画家 原田直次郎没(文久3生、享年37)。</p>	<p>この年</p> <p>▷ 帝国博物館編纂の『美術略史』刊行。</p>
(2)第2回全国絵画共進会	<p>I 審査員</p> <p>審査総長、山高信雄、今尾景年、望月玉泉、原在泉</p> <p>受賞者(京都関係のみ)</p> <p>1等、なし</p> <p>2等、「大塔宮」都路華香、「夏の海辺」山元春挙</p> <p>3等、「東坡遊石鐘山」内海吉堂、「驟雨」仲芳曉、「迦葉哄笑」西山翠嶂、「松溪煎茗」田能村直入、「松亭静隠」河村虹外、「月下罷」大橋翠石、「瓜生兄弟」木島桜谷</p> <p>4等、「群鷺争餌」西村五雲ら24名。日出 5・31</p>		
この年	<p>▷ 京都陶器会社解散(この結果本邦陶磁器には機械応用が適していないかという不安を陶業家にいだかせる)。日本近世窯業史 4</p> <p>▷ 陶工 大丸北峰、福井県加賀から五条坂に移住、小川文斎につく。京都工芸大観、定本九谷</p> <p>▷ 初代三浦竹泉、従来の有声居竹泉から籐月庵竹泉と改号。京都工芸大観</p> <p>▷ 染織業 2代田畑喜八没(天保9生、豆がき友禪を得意とする)。明治美術名作展目録</p>		

京	都	府
<p>1・31 京都彫技会第1回研究会を柳池校に開催(医科大学教授鈴木文八郎、解剖学を彫刻・絵画に応用すべきことについて演説、この年10回開 京都美術協会雑誌 91)</p> <p>1・31 塗師蒔絵青年会、漆器蒔絵物競技会を裏寺町西林寺に開催(同会は明30以来上下区に分別、今回再合併)。 同上</p> <p>1・一 山元春挙塾同攻会と称して組織される(明42、早苗会と改称)。 早苗会解散通知状</p> <p>2・2 京都商工会議所および各商工団体主催で、仏国巴里万国博および欧米視察者一行の送別会を岡崎博覧会場に開催(渡航者は本市実業家20数人でその中には西村治兵衛、錦光山宗兵衛、伊達虎一らもいる)。 京都商工会議所史、京都美術協会雑誌 93</p> <p>2・20~21 京都市が皇太子へ献上する今尾景年筆の屏風が完成、市議事堂に展観。 京都美術協会雑誌 93</p> <p>3・19 市立陶磁試験所初窯(20日焼上)。 日出 3・25</p> <p>3・31 市美術工芸学校教諭鈴木瑞彦、小島光夏退職。 市立美工沿革略</p> <p>4・1~5・26 第6回新古典美術展覧会、⁽²²⁾岡崎町美術館に開催。 京都美術協会雑誌 96</p> <p>4・1~5・30 京都博覧協会、全国貿易品博を岡崎博覧会場に開催(出品;輸出品工芸品その他、輸入模造品を蒐集陳列)。 京都美術協会雑誌</p> <p>4・一 仮称第3高等工業学校設立委員4人が任命される(文部省実業学部局長 岡田良平、京都帝国大学理工科大学教授 中沢岩太、東京高等工業学校長 牛島精一、大阪商品陳列所長 平賀義美ら。これは京都高等工芸学校の発端である)。 実業教育50年史</p> <p>4・一 市美術工芸学校、市立図案調製所を同校附属とし図案調製部と改称。 市立美工沿革略</p> <p>5・6 市美術工芸学校、神阪雪佳を図案調製部技師に、古谷紅麟・竹内泰蔵を同技手に任命。 同上</p> <p>5・12 後素如雲社、森寛齋追弔画会を京都俱樂部に開催(出品;「赤壁図」「山水図」「関羽」「不二山図」など)。 日出 5・13</p> <p>5・24 京都美術協会、創立10年記念式を南禅寺方丈に挙行(21日から5日間、10年間回顧展を同所に開催、24日故鈴木百年門弟、故森寛齋門弟、故幸野榊嶺門弟、故岸竹堂門弟の席上揮毫を天授庵に開催)。 日出 5・16、17、20</p> <p>6・15 市美術工芸学校、応請図案調製規則を定め、従来の依頼品製作規則を廃止する。 市立美工沿革略</p>	<p>6・26 帝国京都博物館、官制改正により京都帝室博物館と改称。 京都国立博物館60年史</p> <p>6・一 京都高等工芸学校、図案科創設準備として武田五一を英・仏・独3国へ、同じく染色科創設準備として鶴巻鶴一を独へ留学を命じる。ともに3年内)。 実業教育50年史</p> <p>8・1 竹内棲鳳・中沢岩太、仏国へ出発(中沢はパリ万国博・欧米の工芸教育の視察を目的とする)。 日出 8・2、京都美術協会雑誌 124</p> <p>10・11 後素協会例会(今尾景年「観音」、原在泉「瀑布」、巖島虹石「鶏」など出品60余点。)</p> <p>10・17 後素青年会第4回展、京都俱樂部に開催(「時雨図」井口華秋、「稚足姫図」細野契月など15点が受賞)。 日出 10・19</p> <p>10・23 第9回日本絵画協会共進会展において、「花ざかり」上村松園、「秋山喚猿」鈴木松年、銀牌をうける。 日本美術院史</p> <p>11・2~4 京都彫技会、第1回競技会を寺町二条の妙満寺に開催(1等なし、2等「磁器朝陽鳳凰彫花瓶」三浦竹泉、「木彫良岑安世像」疋田雪州、「木彫延年舞像」根岸昌雲、「青銅爵彫香炉」平野吉兵衛、「焼桐棚」宮崎平七、「鍛鍍地雷神図花瓶」正阿弥勝義ら)。 京都美術協会雑誌 102</p> <p>11・18 京都美術協会が皇太子御慶事に献納する屏風完成、京都市美術工芸学校に陳列(菊池芳文、都路華香、三宅呉晧、鈴木松年、谷口香嶺、原在泉、山元春挙、竹内棲鳳、森川曾文、今尾景年、望月玉泉、巨勢小石らが揮毫)。 日出 11・17、京都美術協会雑誌 95</p> <p>12・28 荒木矩、京都市美術工芸学校の教諭となる。 同上</p> <p>この年</p> <p>▷ 京都奨美会、英国皇室内装飾用蒔絵飾棚の大作を調製(神阪雪佳、その意匠図案を製作する)。 雪佳遺作集</p> <p>▷ 初代諏訪蘇山、九谷から京都に移住、錦光山の工場に陶磁器を製作。 陶器全集、九谷陶業史下</p> <p>▷ 人形師 11代面屋庄七没。 京の工房</p> <p>この年ごろ</p> <p>▷ 友禪模様一ぼかし文様が大流行。 友禪の変遷</p> <p>▷ 西陣一般紋織はほとんどジャガードに推移する。 西陣の歴史展目録</p>	

参	考	日	本
(1)パリ万国博覧会(京都の受賞者)	<p>大賞</p> <p>「武具曝涼之図壁掛」川島甚兵衛、「天鷲絨友仙」西陣織物同業組合、刺繡 飯田新七、西村総左衛門</p> <p>金牌</p> <p>漆器書棚 京都奨美会、壁掛 佐々木清七、壁掛其他 西村総左衛門、陶器花瓶其他 錦光山宗兵衛、黄銅灯籠 西村安兵衛、友仙 西村総左衛門、飯田新七、金銀象嵌皿 池田合名会社</p> <p>協賛</p> <p>刺繡 谷口香嶺(西村総左衛門)、福井米吉(飯田新七)、飯田藤次郎(飯田新七)、加藤鉄次郎(飯田新七)、刺繡 斎藤卯兵衛(西村総左衛門)</p> <p>銀牌</p> <p>日本画 今尾景年、蒔絵屏風 京都蒔絵協会、刺繡屏風 矢島稠多、壁掛 伊達虎一、陶磁器花瓶其他 伊東陶山、友仙 広岡伊兵衛、縮緬 江原徳右衛門、刺繡 田中利七、七宝 稲葉七穂、銅置物 林新助、銅器 正阿弥勝義、漆器硯箱 藤田弥助、漆器香簞筭 林新助、漆器10種香箱 池田合名会社、硯箱・手箱 三上治三郎、手箱 三上幸三郎、金彫刻人形 三崎清次郎</p> <p>協賛</p> <p>刺繡 今尾景年(西村総左衛門)</p> <p>銅牌</p> <p>日本画 上村松園、鈴木松年、竹内棲鳳、谷口香嶺、絹地屏風 河本喜兵衛、縮緬其他 小林久次郎、刺繡屏風其他 田中利七、田中清七、渡辺伝吉、磁器壺其他 出品奨励協会、同花瓶 鶴田次平、同名刺繍其他 寺林荷亭、陶磁器鉢其他 岡本富之助、磁器花瓶其他 宇野仁松、三浦竹泉、伊藤幸右衛門、漆器冠卓 富田幸七、漆器広蓋 湯浅久吉、人形 清水勝蔵</p> <p>協賛</p> <p>刺繡 柴田沢山(西村総左衛門)、高橋鍛次郎(同)、渡辺セン(同)、田村宗立(同)</p> <p>褒状</p> <p>日本画 望月玉泉、山元春挙、梅村景山、香舛其他 宮部丑三郎、銅花瓶 秦蔵六。 同博出品連合協会報告、京都貿易史</p>	<p>2・28 浅井忠、仏留学のため神戸を出帆(パリ郊外グレーに滞在、明35・8・19帰国)。</p> <p>4・1~30 日本絵画協会・日本美術院連合第8回共進会。受賞、銀牌、尾形月耕「用命天皇道行」、下村観山「蓬菜」、寺崎広業「后徳」、横山大観「長城」、銅賞、菱田春草「柴舟」「菊慈童」、川合玉堂「隠棲の月」、このころから大観、春早の新画風を「縹緲体」「朦朧体」などと呼ぶ。</p> <p>4・14~11・3 パリ万国博覧会開催、⁽¹⁾新古典美術品を出品、絵画で出品受賞した人々は、金賞、大橋翠石、銀賞、橋本雅邦「竜虎」、川端玉章、荒木寛畝、今尾景年、銅賞、竹内棲鳳、横山大観、下村観山ら、洋画では黒田清輝「智・感・情」、久米桂一郎ら、彫刻、長沼守敬「老夫」(金牌)、工芸も盛況であった。</p> <p>5・25 黒田清輝、美術に関する制度、絵画教授法調査のため、文部省から仏国へ出張を命ぜられ出発(明34・5帰国)。</p> <p>7・10 高村光雲・竹内久一・後藤貞行・岡崎雪声ら合作の楠木正成銅像(皇居前)成る(木彫原型は明26・3完成)。</p> <p>8・19 日本金工協会結成、発会式(海野勝珉、香川勝広ら)。</p> <p>10・25~11・30 日本絵画協会・日本美術院連合第9回共進会。受賞者、金版、下村観山「大原の露」、銀版、菱田春草「雲中放鶴」、横山大観「木蘭」、上村松園「花ざかり」、水野年方「勾当内侍」、鈴木松年「秋山喚猿」、寺崎広業「秋国」、川合玉堂「水禽」。</p> <p>10・一 安田靫彦らの紫紅会、今村紫紅らを加え、紅児会と改称(第1回展を日本橋常磐木町俱樂部で開催)。</p> <p>11・一 鹿子木孟郎、渡米。 鹿子木孟郎小伝</p>	<p>この年</p> <p>▷ 明治美術会第11回展。</p> <p>▷ 白馬会第5回展。</p> <p>▷ 荒木寛畝、帝室技芸員に任命される。</p> <p>▷ 寺松国太郎、洋画研究のため、岡山から東京へ行く。</p>
(2)第6回新古典美術品展 受賞者	<p>1等賞 飯田新七、下村正太郎、広岡伊兵衛</p> <p>2等賞 「野猪」木島桜谷、「求道忘軀」都路華香、「軽女惜別」上村松園、伊藤快彦、錦光山宗兵衛、伊東陶山、富田誠、喜多川平八、清水半兵衛、川島織物合資会社、宮崎平七ら21名</p> <p>3等賞 「韓退之の図」西山翠嶂、「夜行の図」</p>	<p>山田耕雲、「聖徳太子遇仙人」細野契月、「たそがれの図」田畑秋濤、「野外日暖の図」橋本菱華、「花鳥の図」上田萬秋、「柳岸薫風の図」西村五雲、「そのの春の図」信近春城、「四季美人の図」内海吉堂、「四天王の図」桜井忠剛、「芹摘の図」堀規矩太郎、「器物の図」海東久、「清水寺の図」中村「少女の図」堀川寿吉郎、「児童遊戯」中立蕪古、儷、「白彫牡丹花瓶」清水六兵衛、「青華牡丹盃」平岡利兵衛、「青華人物盃」岡本富之助、「牛童子置物」月谷乾女ら。 日出 5・6、京都美術協会雑誌 96</p>	

京 都 府	参 考
<p>2・26 竹内棲風・中沢岩太・大沢芳太郎、ヨ 一ロッパから帰国。 京都美術協会雑誌 108</p> <p>3・8 書家 江馬天江没。 書道全集 25</p> <p>3・一 京都高等工芸学校校舎新築工事、市が 購入提供した左京区吉田町の地に開始（約3年を 経て完成）。 実業教育50年史</p> <p>4・1～5・20 第7回新古典美術展、⁽¹⁾ 岡崎に 開催（竹内棲風は作品「獅子」で栖鳳と改名す る）。 京都美術協会雑誌 107</p> <p>4・15 高島屋、はじめて懸賞図案募集をおこ なう。 高島屋100年史</p> <p>4・24 望月家三代追悼会を大雲院に開く（望 月玉爐、玉仙、玉川の遺墨展、また玉泉の「四瞳 図」、玉溪「十六羅漢図」などを展観）。 絵画叢誌 172</p> <p>4・一 古谷紅麟、この月から京都で、松室重 光につき、建築学・室内装飾法を学ぶ。 府庁文書 明44-79</p> <p>4・一 山元春挙「鹿」、第10回日本絵画協会 共進会展で銀牌をうける。 日本美術院史</p> <p>5・8 文部省令11号により、京都市美術工芸 学校を京都市立美術工芸学校と改称する。 府庁文書（市立美工沿革略には5・5とある）</p> <p>6・2 美人画会発会式（花見小路万花園にお いて、会主森川蕉亭、殿島虹石、森雄山、幸野西 湖、山元春挙、桜井忠剛ら出席）。 日出 6・4</p> <p>6・16 関西美術会発会式、京都倶楽部に举行 （発起人；田村宗立・桜井忠剛・伊藤快彦・〔以 上京都府〕、牧野克次・松本硯生・山内愚仙・松 原三五郎〔以上大阪府〕、越旨；西洋画の社会的 普及と研究のため。会頭；中沢岩太、幹事；金子 錦二、大沢芳太郎、発起人らは委員となる。別室 には油絵・水彩画・鉛筆画などの陳列および席上 揮毫がある。来賓の山元春挙・竹内栖鳳が洋風画 を揮毫、田村宗立が日本画を揮毫）。 京都美術協会雑誌 108</p> <p>6・24 竹内栖鳳・中沢岩太、市議事堂の京都 美術協会第10回総会で、欧州の美術および美術工 芸について講演。 京都美術協会雑誌 109、110、日出 6・25</p> <p>6・一 加藤源之助、伊藤快彦の鐘美会に入る （約1年間）。 日本美術工芸 302</p> <p>7・23 神阪雪佳、英国グラスゴー博覧会およ び欧州各国の工芸図案取調のため渡欧を命じられ る（市および農商務省より）。 市立美工沿革略、雪佳遺作集</p> <p>7・一 工学士金子篤寿、市立染織学校校長兼 教諭となる（大6・1まで）。 実業教育50年史、府誌下</p> <p>8・14 今尾景年筆の金地院大小書院襖絵の披 露を行なう。 絵画叢誌 176</p>	<p>8・一 京都高等工芸学校機織科創設準備とし て萩原清彦を機織学研究のため、満3年間独・仏 留学を命じる。 実業教育50年史</p> <p>9・24 漆工 湯浅久吉没（享年59）。 市立美工沿革略</p> <p>9・24 関西美術会、第1回競技会〔批評会〕 を清水成就院に開催〔批判審査委員；金子錦二、 審査員；桜井忠剛・伊藤快彦・田村宗立・松原三 五郎・牧野克次・山内愚仙・松本硯正・大沢芳太 郎ら（1等「山村秋興」（水彩）牧野克次、「肖像」 （油）山内愚仙、2等「下鴨の景色」（水彩）田村 宗立、「小供」小笠原豊涯、3等「溪流の図」（水 彩）田村宗立、「田舎の雪景」伊藤快彦、中林僊 ら〕。 京都美術協会雑誌 111、112</p> <p>10・13 山能村直入、若王祠下に画神堂を建設 し披露。 絵画叢誌 177</p> <p>10・13 京都南画協会展、永観堂に開く。 同上</p> <p>10・15 日月会美術展覧会（鈴木松年、原在泉、 望月玉泉、川端玉章ら）。 同上</p> <p>10・一 山元春挙・菊池芳文、第11回日本絵画 協会共進会展の審査員となる。 日本美術院史</p> <p>11・1 関西美術会および京都彫技会、秋季連 合展（関西美術会に関しては第1回展）を御苑内 元博覧会場に開催〔経費は市より補助をあおぐ、 油絵・水彩・図案・写真・彫刻・版画・陶器工芸 品などを陳列、うち絵画は約200点、会員所蔵品 も参考品として展示、出品の多くは東京の明治美 術会・白馬会からのもの。洋画は審査せず。 1等「朧銀荒波鷗図彫刻花瓶」正阿弥勝義、2 等は写真が大部分。出品作「山僧快力」（弁慶之 図）、「少女の茶摘」田村宗立、「スエズ景色」（油 絵）竹内栖鳳ら26点、宮内省からの御買上がある〕。 京都美術協会雑誌 113</p> <p>11・18 富田幸七、市立美術工芸学校漆工科教 諭となる。 市立美工沿革略</p> <p>この年</p> <p>▷ 陶工 宮永東山、石川県大聖寺より京都に 移住。 定本九谷</p> <p>▷ 橋本関雪、竹内栖鳳の門に入門。 日本美術年鑑 昭19-21</p> <p>▷ 二条離宮修理を土佐光武（天井張付）、久 保田桃水（狭間張復）、武内雅隆（狭張復）に命 ず、（巨勢小石、田中出峯、岸九岳らは先年御用 命）。 絵画叢誌 178</p> <p>この年ごろ</p> <p>▷ 西陣では在来のジャガードにかわり一層コ ンパクトになった新ジャガードが製作される。 西陣史</p> <p>▷ 友禅模様は写生ものが大流行（この頃から 流行の変遷がめまぐるしくなる）。 友禅</p>

参 考	日 本
<p>(1)第7回新古典美術品展 受賞者</p> <p>1等賞金牌、「獅子」竹内栖鳳、「法塵一掃」山 元春挙、「草花模様縞珍女帯」清水平兵衛、「大井 川模様女帯」下村庄太郎</p> <p>2等賞銀牌、「李太白」都路華香、「衣通郎姫」 菊池芳文、「無情」谷口香嶠、「悉多太子」川北霞 峯、「劍之舞」木島桜谷、「読書」伊藤快彦、「一 桜」桜井忠剛、「竹取翁像」疋田雪洲、「虎型像」 錦光山宗兵衛、「京錦蘭模様女帯」喜多川平八、 「有職竜模様金通女帯」山田九一郎、「縞珍敷島模 様女帯」小川与三郎、「友仙礪石模様」島村善助、 「縮緬友仙花模様」西村治兵衛、「蒔絵河原院料紙 文庫」西村彦兵衛、「蒔絵手箱」三上幸三郎、「蒔 絵名取川模様硯箱」熊川伊三郎、「曉鶉晚臯図花 瓶」錦光山宗兵衛、「山吹模様花瓶」伊東陶山、 「墨画山水花鳥」加藤友太郎、「紅葉鷓鴣花瓶」林 小伝次、「香煙おのころ鳥式」正阿弥勝義</p> <p>3等賞銅牌、「昆首羯磨天」梅村景山、「炎天」 橋本菱華、「残陽」西山翠嶂、「艱雪」山田耕雲、 「聴音」仲芳眺、「垓下離別」細野契月、「中将姫」 三宅晁眺、「清涼」河合泉石、「戦後之月」藤井春 水、「喘牛」上田万秋、「蕃人漂着」阿部春峯、 「救之光」内畑眺岡、「爛柯山」奥谷秋石、「趨進 如風」岸米山、「鬪花」朝山竹涯、「雪けしき」川 村曼舟、「六波羅の禿」曾我玉鼎、「浜辺の狩」織 田一磨、「晚婦の図」堀規矩太郎、「無邪氣」赤尾 亀太郎、「賢愚無別」西沢光成、「木彫学生」本田 青雲、「木彫牧童」根岸昌雲、「木彫鷄」梅村景山、 「塑造児童」錦光山翫古、「木彫児童呼群」葛尾眞 貞、「丸竜模様女帯」中村半兵衛、「竹蒿模様縞珍 広帯」辻川新三郎、「旭若松模様帛紗地」十合重 助、「織物扇額重盛諫父図」井上力造、「各種裂模 様厚板織」金田忠兵衛、「源氏模様博進織」河辺 喜三郎、「富士模様帛紗地」内貴清兵衛、「雪中竹 模様明珍織」浜部儀八郎、「笹模様清涼織」西村 吉右衛門、「松に鶴図額」田中利七、「牡丹模様半 衿」荒川益太郎、「波に鷗模様帛紗」寺島六之助、 「菊水模様半衿」森川忠三郎、「あやめ模様半衿」 和秀忠兵衛、「草羽織地夜景模様」高山与三吉、 「縮緬友仙馬に風模様」内貴清兵衛、「縮緬友仙滝 模様」野口安左衛門、「同熊模様」河辺呉服店、 「同四季模様」安田太七、「同松ニ鷹模様」下村萬 次郎、「同動物模様」下村正太郎、「蒔絵和歌三社 梨地文台硯箱」島津吉平。 京都美術協会雑誌 107</p>	<p>3・2～31 日本絵画協会・日本美術院連合第 10回共進会開催。受賞、銀賞、寺崎広業「美人」、 山元春挙「鹿」、横山大観「老君出関」、菱田春草 「蘇李訣別」「釣婦」、水野万年「少女」、尾竹国観 「湖」、富岡永洗「美人」。</p> <p>4・一 鹿子木孟郎、米国から渡英、6月仏国着、 ジャン=ポール=ローランスに師事、10月住友家の 給費を受けることに決定する。 鹿子木孟郎小伝</p> <p>5・一～11・一 英国グラスゴー博覧会開催。</p> <p>6・6 鍋本清方、山中古洞、池田輝方、大野 静方ら浮世絵系の画家、鳥合会を結成、第1回展 を日本橋八重洲館に開催（～6・8、明44第22回 展まで）。</p> <p>6・一 中村不折、仏国に留学。</p> <p>8・9 文部省視学官正木直彦、久保田鼎の後 任として東京美術学校校長となる（昭7・3・31退官）。</p> <p>9・28 日本画家 滝和亭没（天保3生、享年 70）。</p> <p>9・一 大日本窯業協会、第1回全国窯業品共 進会を日本美術協会に開催。</p> <p>10・10～11・13 白馬会第6回展、黒田清輝 「裸体婦人」、コランの作品などは風俗を乱すも のとして、当局は布で下半身を覆って出陳させる。</p> <p>10・13～11・19 日本絵画協会・日本美術院連 合第11回共進会。金賞、寺崎広業「月光灯影」、 銀賞、下村観山「伊展古話」など。</p> <p>10・一 河合新蔵、米国経由にて渡欧（パリに 2年半留学、ラファエル=コランに師事、明37帰 国）。</p> <p>11・7 日本図案会創立。</p> <p>11・21 岡倉天心、インド巡歴のため神戸を出 帆（明35・10・30帰国）。</p> <p>11・21 明治美術会の中堅作家吉田博、満谷国 四郎、中川八郎、丸山晚霞、石川寅治、大下藤次 郎ら、明治美術会を解散し、その後身として太平 洋画会を結成（第1回展明35・3・20～4・30）。</p> <p>12・16 横井時冬『日本絵画史』刊。</p> <p>この年</p> <p>▷ 渡辺沙鷗、日本書道会を起し、六書展覧会 を開催。</p> <p>▷ 美術研精会創立、日本画の青年作家によっ て研究と育英を目的として結成。</p> <p>▷ 寺松国太郎、小山正太郎私塾不同社に入る。</p>

京	都	府
1・一 神阪雪佳、欧州から帰国。 市立美工沿革略		9・13 浅井忠、京都高等工芸学校教授に任命される。(一家をあげて京都に移住、上京区仲町丸太町に居住、同校図案科および染色科の図画実習を指導、同時に教頭の地位にあって校長中沢岩太を助ける)。 浅井忠
3・2 第12回日本絵画協会共進会で竹内栖鳳「故都の秋」銀牌をうける。 日本美術院史		9・20 洋画家二十日会創立(在洛洋画家の親睦団体、第1回例会を祇園下河原月見町の田村宗立宅に開催、桜井忠剛、伊藤快彦、牧野克次、大沢芳太郎ら出席、以後会場は会員の持ちまわりで月1回開く。席上、唐紙・画帖・短冊などへの各自揮毫、各種展覧会批評、芸術談などがある。 12・20には浅井忠が初出席、次第に隆盛となり美術新聞記者金子静枝、黒田天外、北村鈴菜、陶芸家宮永東山、錦光山宗兵衛、建築の武田五一、色染家鶴巻鶴一、その他、中沢岩太、湯浅半月、岡本橋仙、北垣静処ら多彩な顔ぶれとなる。大正末年ころまで継続)。 洛味 85、二十日会記事、日本美術工芸 301
3・15 高島屋、最初の流行だより『新衣裳』を創刊。 高島屋100年史		10・11 後素協会例会(木島桜谷「月下狸図」、千種掃雲「武蔵野」、西村秀岳「月下図」、巖島虹石「菊花図」、川北霞峰「鶴図」、服部春陽「滝図」)。 日出 10・12
3・25 陶工 5代和気亀亭没(大黒町通五条下ル称名寺に葬る)。 京都名家墳墓録		10・11 如雲社例会、(国井応文「寒鴉図」、鈴木松隠「秋溪図」、河村虹外「小墨山水」、田能村小篁「花鳥図」、奥谷秋石「着色山水図」)。 同上
3・28 京都高等工芸学校、官立学校として創立。 勅令98、実業教育50年史		11・23 南禅寺法堂再建起工式(明28焼失)。 京都美術協会雑誌 125
3・一 市会、市立染織学校に新たに動力織機および電力発動機を設備することを決議。 府誌下		11・27 日本画家 森川曾文没(弘化4年生、享年56、一乗寺金福寺に葬る)。 京都名家墳墓録
4・1~5・10 第8回新古美術品展、 ⁽¹⁾ 岡崎に開催(図案部を新設する)。 京都美術協会雑誌119、絵画叢誌180		11・一 山田寒山 京都東山一心院で印聖高芙蓉の墓を発見。 書道全集 25
4・4 西山翠嶂、京都市立美術工芸学校助教諭に任命。 市立美工沿革略		12・8 篆刻家 後田茶津没(享年76、東福寺盛光院に葬る)。 京都名家墳墓録
4・30 牧野克次、京都高等工芸学校助教授に任命され、京都に移住。 京都洋画の黎明期		この年 ▷ 図案精英会設立。 図案年鑑 1 ▷ 入江波光、森本東閣に師事し、波光の号をうける。 日本美術年鑑 昭22-26
5・2 森本後凋、京都帝室博物館長となる。 京都60年史		▷ 伊達虎一、欧州より帰国。 西陣史 ▷ 友禅模様、次第にアール・ヌーボが流行(洋風図案流行の萌芽)。 友禅の変遷 ▷ 山本竟山、清国へ赴く(楊守敬らを訪い、金石拓本を持ち帰る)。 書道全集 25 ▷ 大谷探検隊、クチャ・ホータン方面の第1回探検を行った。 同上 ▷ 作品、油絵「西洋少女図」鹿子木孟郎。 京都の明治文化財 ▷ 陶工11代楽家没(慶入)。 京焼百年の歩み ▷ 売扇庵天井の扇面画完成。 ⁽¹⁾ 京都の明治文化財
5・18 刺繍師 田中利七没(弘化4・11京都生)。 京都美術協会雑誌 119		
6・1~15 後素協会、東京上野日本美術協会列品館に絵画展覧会を開催。 絵画叢誌 185		
6・一 宮崎半兵衛の画仙堂竣工。日出 6・19		
6・一 指物師 11代駒沢利齋没(享年51)。 談交テキスト茶道具編		
7・16 谷口香嶺、伊テュラン市万国装飾博覧会および独ライン州博覧会視察のため渡欧。 市立美工沿革略		
7・19 西陣織物模範工場、農商務省より設立認可。(伊達虎一、田畑庄三郎、鳥居栄太郎、喜多川平八、稲田卯八ら8人によって設立)。 日出 5・21、7・20		
7・24 金工(釜師) 11代大西徳兵衛浄徳没(享年77)。 日本の鍔金		
8・30 日本画家 山田文厚没(享年57、一条淨福寺に葬る)。 平安名家墓所一覧		
8・一 大原三千院の襖絵の揮毫者決定(玄関原在泉、次の間今尾景年、の間鈴木松年、座敷菊池芳文、奥座敷竹内栖鳳、椽の間望月玉泉)。 絵画叢誌 188		
9・10 京都高等工芸学校、入学式を挙行(翌11日授業開始、教授:福井松雄、浅井忠、助教授:牧野克次、小島成治、講師:宮島幹之助、さらに当学期中に次の者が講師として嘱託される。石井誠一、都鳥英喜、ケイディー夫人)。 実業教育50年史、京都美術協会雑誌 124		

参	考	目	本
(1)第8回新古美術品展覧会 受賞者 1等賞、錦光山宗兵衛、正阿彌勝義、清水半兵衛、飯田新七 2等賞、「咆哮」木島桜谷、「寂光院」細野契月、錦光山宗兵衛、金田兼次郎、堀川壽吉郎、三上幸三郎、島津平吉、戸島光孚、伊東陶山、加藤友太郎、香川勝廣、平野吉兵衛、権田広助、川島織物会社、市田文次郎、喜多川平八、田中利七、島村善助、西村治兵衛、下村正太郎、沓谷瀧次郎、宮崎平七 3等賞、岸米山、川北霞峰、橋本菱華、梅村景山、猪飼敬眞、三宅呉眺、西山翠嶂、服部春陽、八田青翠、川村曼舟、上田万秋、松原三五郎、牧野克次、堀規矩太郎(以下略)。 京都美術協会雑誌 119		1・一 彫刻家新海竹太郎、独留学(明33・1出発)より帰国し、太平洋画会に参加、彫刻部を主宰。 3・2~29 日本絵画協会・日本美術院連合第12回共進会開催。受賞、菱田春草「王昭君」、下村観山「問答」、横山大観「茶々淵」、梶田半古「春宵苑」、竹内栖鳳「故郷の秋」など。 3・20~4・30 太平洋画会第1回展開催。 3・一 『美術新報』創刊(〜大9・12)。 4・3 巴会結成(川村清雄、東城鉦太郎ら)、第1回展を芝公園日弥生館に開催。 6・11 日本画家 山名貫義没(天保7生、享年67)。 7・一 大八木一郎、東京美術学校西洋画科を卒業(後三重県に移住)。 日本美術年鑑 明40 9・20~10・29 白馬会第7回展開催、岡田三郎助、和田英作帰国し、滞欧作を出品、岡田「読書」、和田「婦人読書」、藤島「天平の面影」(藤島の作品は、この時代の浪漫主義の先駆をなす)。 10・1~5 烏合会第5回展(日本橋常磐木俱樂部)、鑄木清方「一葉女史の暮」。 10・1~11・30 日本絵画協会・日本美術院連合第13回展開催(創立5周年記念として美術院内に開催)。銀賞、梶田半古「秋」、寺崎広業「大塔宮」、川合玉堂「涼陰」、菱田春草「諾冊二尊」、横山大観「迷子」など。 この年 ▷ 滞仏中の浅井忠〔3・21 グレーを引きあげてパリに帰る。5・12イタリア旅行に出発、6・14トリノ、ローマ、ナポリ、フィレンツェを経てヴェネツィアに到着、6・28ころロンドンにゆき、夏目漱石と数日過ごす。7・4 ロンドンから帰国の途につき8・21東京に到着(この間の主な作品、「グレー洗濯場」「ロアン河洗濯場」「グレーの橋」「冬木立」「農婦像」「縫もの」「ノメンターナ門」「ナポリ」「ヴェネツィア」「コロンボ」など]。	
(1)売扇庵扇面絵 所在地 京都市中京区六角富小路西入ル 所有者 宮脇売扇庵 制作者 明治期東西諸家(60名) 材質 杉板着色 形状 扇面画 60面 橋本菱華「旭日慶鳴」(朝日に鴉)、奥谷秋石「歳且新鶯」(樸に黄鳥)、山田雙竹「翠色早栄」(樺松)、都路華香「賽祠送迎」(土製の雙狐)、藤嶋清連「紅白雙瓊」(白梅と紅梅)、巖島虹石「柳下翅軽」(柳に燕)、三宅呉眺「芳草喜晴」(萱に雀)、望月玉泉「春風香羹」(岩柳に鮎)、小沢文隆「霞綺雲英」(山桜)、谷口喬嶺「絳葩安貞」(桃花に雛人形)、菊池芳文「秀萼陳瑛」(桜)、富岡鉄斎「幽谷美生」(蘭)、土佐光武「嘉葵呈瑞」(葵に冠)、梅村景山「国色明媚」(牡丹)、今尾景年「月前疾駛」(月に杜鵑)、久保田桃水「万福集萃」(蝙蝠)、前川文嶺「碧竿操鏡」(竹)、長谷川玉純「盛夏豔異」(花菖蒲)、羽田月洲「秋錦麗鮮」(萩)、巨勢小石「梅子雨妍」(梅実)、海外天年「嬉拵傾傾」(住吉土産)、藤井玉洲「菊露延年」(菊に白一鳥)、上田萬秋「巨葩笑嗎」(鮑)、一見連城「清絶学仙」(白菊)、河辺華拳「瞭喉翎白」(雲に鶴)、浅田霍文「柿実丹壁」(柿実)、吉谷清馨「報啄朝夕」(矮鴉)、神坂雪佳「翻涛醉石」(浪)、中島有章「連穂潤澤」(稲)、国井忠陽「巖頭綉額」(孔雀、望月玉溪「温菴解睡」(綿の花)、原在泉「神花潔示」(榊の花)、竹川友広「竹草整備」(笹に羯鼓)、内海吉堂「遊鯉飽餌」(藻に鯉)、鈴木松年「驚蟬啼葉」(杉に蟬)、森雄山「晚涼買醉」(壺盧)、木嶋桜谷「猷詠磨研」(梶の葉に筆)、田能村直入「靈莖肥堅」(芝)、浅江柳喬「窓外娟娟」(芭蕉)、山元春拳「飛騰升天」(龍)、森川曾文「浅渚盤旋」(芦に白鷺)、鈴木松隠「彩鳥纏綿」(松に翠雀)、川北霞峰「棘叢濃赤」(笹鯛)、榊原文翠「泰平楽劇」(陵王の面と桴)、森春岳「霜葉形赫」(紅葉)、竹内栖鳳「咆哮裂圻」(虎)、西村秀岳「水肌雪珀」(雪に水仙と鷓鴣)、田中一華「邦歌六客」(六歌仙図)			

京	都	府
2・2 中沢岩太・浅井忠の発起で西洋画家の懇親会を中村楼に開催(田村宗立、大沢芳太郎、牧野克次、錦光山宗兵衛、印藤真楯、桜井忠剛、宮永東山、都鳥英喜、伊藤快彦、東京より黒田清輝、久米桂一郎、松岡寿ら出席)。黒田清輝日記		(図案精英会を京都図案協会と改称。銀、「謡曲本籍」猪飼敬貢、「染織模様流れの畔」下村玉広、「噴水嫦娥の意」古谷紅麟、「友禅模様」平田秋穂、「染織模様白露の関係」高田鶴州)。
2・9 後素青年会第1回展、裏寺町妙心寺に開く、(議長:田畑秋濤、投票により平均点、50点「松鶴」山田耕雲、50点「春景山水」川村曼舟、45点「牧場」山下竹斎、44点「瀧」徳田隣斎、44点「秋景山水」田畑秋濤ら)。日出 2・10		京都美術協会雑誌 136
2・一 南画家 内海吉堂、清国より帰国(前年4月渡清)。絵画叢誌 193		11・1~25 関西美術会、第2回展を岡崎町美術館に開催(油絵、水彩、擦筆画、装飾画、写真など合計約500点、二葉会の出品がその4分の1を占める。また京都大学より解剖学教室用資料の人体解剖図10枚を借り入れ展示、浅井忠は「グレー風景」「シナイ山」「マルタ島」「コロポ港」など40数点の滞欧作を出品、加藤源之助をはじめ鉛筆素描画8点を出品。浅井忠図案、清水六兵衛製作の大津絵中皿12枚も陳列、なおこの回は従来のように代価と作家の名前を貼り出さず、ただ番号と画題を掲げるだけ)。
2・一 谷口香嶺、欧米より帰国。市立美工沿革略		京都美術協会雑誌 136、浅井忠、日出 11・2~12
3・10 後素青年会開催(上田万次郎、川北霞峰、川村景丹、山田耕雲、細野契月、井口華秋らその他10余名、規則改正、この日雑誌『精美』発行)。日出 3・10		11・3~4 京都後素青年会秋季大会、有楽館、建仁寺大中院に開催(1等「閑話」(100点)細野契月、2等「蘇武」(93点)服部春陽、3等「焚火」(80点)井口華秋、4等「田舎の秋」山下竹斎、5等「月景」(78点)玉舎春暉、6等「夕暮」山田耕雲、その他)。京都美術協会雑誌 136
4・5 中沢岩太、市議事堂で開かれた第2回学生大会講話会にて、「第5回内国勸業博に於ける陳列を論ず」を発表、純正美術と工芸品との区別のあいまいさ、陳列の不完全さを指摘。日出 4・7		11・15 関西美術会、第3回総会を岡崎町博覧会館に開催、浅井忠の発議により田村宗立の多年画道に尽した功績にたいし表彰することを満場一致できめる。(なおこの総会で中沢岩太会頭は演説のなかで、この年以前の関西美術会展について、「若し公平にこの展覧会を評せば京都市内における世俗の習慣とも云うべき祭典の余興に近きもの」と述べている)。京都美術協会雑誌 136、京都洋画の黎明期、日出 11・16
4・9 第2回後素青年会、裏寺町妙心寺に開催(「夜光」(50点)川村曼舟、「ゆく春」(50点)田畑秋濤、「畑時義」(50点)川北霞峰、「処女」(49点)細野契月、「唐美人」大亦墨亭その他)。日出 4・10		11・一 水曜会展覧会開催(同会は栖霞塾竹杖会内の有志の団体の名で、当事の幹事であった内畑眺園が主となり、それに八田青翠、橋本閑雲、森吐月、徳田隣斎、花井抱甕、ついで西山翠嶂、井口華秋、西村五雲らで組織、雑誌『黎明』発行1年1回の公開展を催す。5年間で終わる)。京都に於ける日本画史
4・28 市立陶磁器試験所、農商務省令により市(立)陶磁器試験場と改称。藤江永孝伝		12・一 小野竹橋、京都に上り竹内栖鳳の門に入る。小野竹橋作品集
4・一 神阪雪佳、浅井忠、菊池素空ら、陶芸家有志と趣味団体遊陶園を設立(趣旨、優秀陶磁器の製作を楽しむこと、園長 中沢岩太、幹事 藤江永孝、他に宮永東山・伊東陶山・清水六兵衛・錦光山宗兵衛も加わる。毎月1回市立陶磁器試験場で研究会および作品発表会を開催、そのほか図案の製作、図案家と陶芸家との交流促進を意図)。藤江永孝伝、宮永東山自筆履歴書		この年
5・5~6 図案精英会、第1回会員展を京都倶楽部に開催(古谷紅麟ら)。日出 5・6		▷ 土田麦麴、入洛、鈴木松年の門に入る。(明38・12竹内栖鳳の門に入る)。麦麴遺作集
5・一 京都ハリストス正教会会堂完成(明34着工、松室重光設計ビザンチン式)。京都の明治文化財		▷ 友禅模様、トルコ紋様大流行。友禅の変遷
6・2 浅井忠、聖護院洋画研究所を聖護院町36番地の自宅内に設立、この日開所式を挙行(伊藤快彦、桜井忠剛、牧野克次の各家塾はこれに合併する)。浅井忠、京都洋画の黎明期		▷ 山本竟山、再び渡清して、呉昌碩・楊守敬・潘存らを歴訪した。(京都鳳雛文庫所蔵の潘存筆臨争坐位帖一巻、楊守敬書の行書水経注などは、この折に得たもの。書道全集 25
6・17 京都の青年画家、絵画研究会を組織し、円山平野家に発会式を挙行。絵画叢誌 198		▷ 鈴木松年、田能村直入、今尾景年、望月玉泉、野村文举、山元春举、竹内栖鳳、その他数名、絵画を天覧に供奉。絵画叢誌 196
6・一 桜井忠剛、このころ尼崎へ移住(後市長となる)。日本美術工芸 301		▷ 作品「聖護院の庭」・「中沢博士像」浅井忠
10・18 田能村直入の90歳賀筵および田能村竹田翁年祭挙行。絵画叢誌 201		▷ 石崎光瑤、竹内栖鳳の門に入る。京都に於ける日本画史
10・22~23 京都図案協会展、有楽館に開催		

参	考	日	本
(1)第5回内国勸業博覧会受賞者(第10部) 1等賞		1・10 横山大観・菱田春草、インド旅行に出発(7月下旬帰国)。	
「極東の名山」山元春举筆、「瑞西の絶景」竹内栖鳳筆、「北米の大瀑」都路華香筆、染工 榊原芦江作、「友禅染世界三景図壁掛」飯田新七		2・21 下村観山、文部省留学生として渡英のため横浜を出帆(12・10 帰国、日本画家としては最初)。	
下絵 竹内栖鳳筆、繡工 加藤鉄次郎作、刺繍「ライオン図壁掛」飯田新七		3・1~7・31 第5回内国勸業博 ⁽¹⁾ 大阪で開催(2等賞、野村文举「野馬溪鮎返し図」、寺崎広業「横笛訪滝口入道図屏風」、上村松園「姉妹三人図」、橋本雅邦「瀟湘八景」、洋画・彫刻・工芸では岡田三郎助「読書」、和田英作「こだま」、米原雲海「幼児と林檎」、赤塚自得「荒磯図額」、瀧川惣助「雲月額」など)。	
下絵 木嶋桜谷筆、繡工 小林久次郎作、刺繍「双虎図壁掛」西村総左衛門		3・7 漆工 池田泰真没(文政8生、享年79)。	
「綴織閑龍イサベラ女王に謁する図壁掛」川島甚兵衛		4・一 日本美術院・日本絵画協会連合第15回共進会開催(上野)、銀賞 寺崎広業「王陽明」、川合玉堂「朝」など。	
2等賞		7・15 洋画家 和田英作、欧州留学より帰国(明32・5 出発)東京美術学校教授となる。	
「姉妹三人図」上村つね、「狐猿叫雪図」山元春举、「春の夕、霜の朝図屏風」菊池芳文、「響天響地図屏風、孔子磬ヲ撃チ隠士其響韻ヲ聴ク」		9・16~10・27 白馬会第8回展開催、黒田清輝「菊池前文部大臣像」、和田英作「懷郷」、なお青木繁は「黄泉比良坂」などにより白馬会賞受賞。	
考案 神阪雪佳、漆工 富田幸七、「蒔絵柳橋文台硯箱」西村彦兵衛		10・10~11・15 日本絵画協会・日本美術院連合第15回共進会開催。銀賞 横山大観「釈加父に逢う」、下村観山「ダイオゼニス」、寺崎広業「山水」、川合玉堂「焚火」、菱田春草「鹿」など。この共進会はこれをもって終止。	
考案 神阪雪佳、漆師 新畑市兵衛、金具 古市恒七、蒔絵 山本利兵衛、「同螺鈿立浪手匣」京都斐美会		10・25 大島如雲・岡崎雪声ら、第1回鑄金展を上野に開催。	
金線七宝、「竹図筒形花瓶」並河靖之		10・25 東京・横浜の陶画協会、連合して第1回全国陶画共進会を上野公園に開催(京都の清水焼栗田焼も出品される)。	
下絵 木嶋桜谷、染工 藤井喬秀、赤井卯三郎、「天鷲絨友禅風図壁掛」西村総左衛門		11・一 仏領トンキンハノイ博覧会開催(京都より飯田新七・川島甚兵衛・錦光山宗兵衛・稲葉七穂ら名誉大賞を受賞)。	
下絵 木嶋桜谷、染工 赤井卯三郎、藤井繁太郎、「同銀世界図壁掛」西村総左衛門		この年	
考案 神阪雪佳、紋工 田中光太郎、「華錦織春秋草花模様卓被」鳥居榮太郎		▷ 小野鷲堂、斯華会を起し、『書道講習録』を刊行。	
3等賞		▷ 岡倉天心、『The Ideals of East』ロンドンより出版。	
「誥汾輿魏図、魏ノ始祖神元皇帝樹間ニ天女トシ継嗣ヲ得ル」西山翠嶂、「檜秋、銀杏樹落葉ノ下ニ児輩狂女ヲ見ル」細野契月、「寒汀水禽図屏風」上田萬秋、「露照、黍畑ニ雌雄鶏」山田耕雲、「揺落、樹林落葉ノ候ニ鹿一頭」木嶋桜谷、原型 沼田一雅、「磁製狢夫欺熊」錦光山宗兵衛、考案 神阪雪佳、「須磨浦手匣」迎田嘉兵衛、考案、神阪雪佳、蒔絵 富田幸七、「同曙書棚」三上治三郎、「陶製漏空桐花葉花瓶」錦光山宗兵衛、「織物玉簾浪形帯地」飯田新七、原図 神阪雪佳、染工 木村鉞次郎、「友禅染四季屏風」西村治兵衛、「綴織芦雁図屏風」川島甚兵衛、刺繍 田中宗二郎、「刺繍小児歡喜図額」田中利七、考案 神阪雪佳、「友禅染紅葉壁掛」広岡伊兵衛、「絹地木板印刷千種」山田芸艸堂、「真美大観木版刷挿画」山下官十郎。京都美術協会雑誌 133		▷ 2代玄々堂松田緑山没(天保8 京都生、名敦知、俗称弥太郎、享年67、青山墓地に葬る、のち京都東山霊山墓地に改葬)。	
		▷ 東京工業試験所設立。	
		▷ 鹿子木孟郎、ベルギー・スイス・イタリアに遊ぶ。	
		▷ 田村宗立「越後海岩窟図屏風」(第5回内国勸業博出品)。京都工織大人文 10	

京	都	府
<p>1・21 日本画家 重春塘没(享年72、天保4・10・2生、東山黒谷に葬る)。 京都名家墳墓録</p> <p>2・2～3 幸野樸嶺追薦展、京都御苑内に開催。 美術新報 3:20</p> <p>2・11 川島甚兵衛、守住勇魚原図の「壁飾・蒙古襲来の図」を天覧に供す。 美術新報 3:1</p> <p>3・17 京都南画協会、寺町の事務所に開く、(出品250余点)。 美術新報 3:3</p> <p>3・31 富岡鉄斎、市立美術工芸学校を辞職。 京都美工学校沿革略</p> <p>3・一 山元春挙、農商務省から欧米における各種工芸の意匠図案等調査のため出張を命ぜらる。(6月出発、10月病気のため帰国)。 都市と芸術 山元春挙先生追悼号</p> <p>3・一 鹿子木孟郎、河合新蔵とともに仏国から帰国(入洛し、上京区室町丸太町上ルに居住、4月鹿子木室町画塾を創む)。 鹿子木孟郎小伝、日出 3:29</p> <p>4・1～5・20 第9回新古典美術品展、⁽¹⁾ 岡崎に開催。 京都美術協会雑誌 142</p> <p>4・一 京都染物同業組合、染業補習学校を釜座通下立売下ル染織学校内に設立(設立者〔校長〕石田喜兵衛)。 市学事要覧 明43</p> <p>4・10～ 関西美術会第2回競技会、祇園花見小路有楽館に開催(絵画総数150余点、うち大部分は水彩画。審査員、鹿子木孟郎、松岡寿、河合新蔵。審査結果、鉛筆画、1等、加藤源之助、芝千秋、2等、梅原良三郎、加藤源之助、3等、小川多三郎、明石精一、梅原良三郎、芝千秋。水彩画、1等、牧野克次、石川一、加藤源之助、中林樫、新井謙也、2等、浅井忠、新井謙也、牧野克次、梅原良三郎、石川一、中沢岩太、3等、浅井忠、鶴巻鶴一、石川一、牧野克次、新井謙也、武田五一、加藤源之助。鹿子木孟郎の滞仏中のデッサンも陳列)。 日出 4:11、12、美術新報 3:3</p> <p>4・16 京都から今尾景年と望月玉泉帝室技芸員となる。 museum 202</p> <p>5・11 河合新蔵、東京の雑誌社に招聘せられ東上。 日出 5:14</p> <p>5・一 黒田重太郎、鹿子木孟郎宅で洋画の手ほどきをはじめて受ける。 画房襍筆</p> <p>6・1～10 京都後素協会展、御苑内博覧会場に開催(主な出品、都路華香「秀吉御苑観桜図」、川北霞峰「戦後の春」「夏の暮」、山元春挙「牡丹と薔薇」その他)。 美術新報 3:7、京都美術協会雑誌 143</p> <p>6・一 日本国有鉄道二条駅本屋完成(設計者未詳、和風)。 京都明治文化財</p> <p>9・一 鹿子木孟郎、浅井忠の推薦で京都高等工芸学校講師となる(また聖護院洋画研究所の指導にもあたる)。 京都洋画の黎明期、鹿子木孟郎小伝</p>	<p>10・10～11・9 関西美術会第3回展、⁽²⁾ 岡崎町美術館に開催、総出品数600余点、非常に盛況、水彩画最も多く、油絵、墨絵、写真、印刷物、図案、陶器などを陳列。 京都美術協会雑誌 147</p> <p>10・一 沢田宗山、市から工芸図案研究のため3年間米留学を命ぜられる(正木東京美術学校校長と共にセントルイス博を見学。11月ニューヨークにおいて日本図案調製所を自営)。 京都工芸大観</p> <p>10・一 幸野樸嶺『草花百種』後篇上下2冊刊行。 樸嶺遺墨</p> <p>11・12 田能村直入の絵画文庫落成式および画神祭を行う。 美術新報 3:17</p> <p>11・13 京都南画協会秋季展、永観堂に開催。 美術新報 3:14</p> <p>11・23 第2回京都水曜画会(竹内栖鳳門下生、昨秋結成)。 美術新報 3:8</p> <p>11・25 谷口香嶠、洛東双林寺畔菊溪山荘に歴史画展を開く。 美術新報 3:18</p> <p>12・一 富田幸七、金閣寺修理に関する漆工工事監督を命ぜらる。 日出 明43・3:19</p> <p>12・一 京都府庁本館完成(明34・11 着工、松室重光(技師)、一井九平(地方技師)設計、ルネサンス式)。 京都の明治文化財</p> <p>この年</p> <p>▷ 夏、安井曾太郎、西大谷の蓮池で写生中中林樫に逢い、彼のすすめにより浅井忠聖護院洋画研究所に入る。 日本美術年鑑 昭31、京都洋画の黎明期</p> <p>▷ 鹿子木孟郎、「水彩画専門論」について三宅克巳と雑誌『美術新報』上で論争、(鹿子木は水彩画を独立芸術と認めない)。 美術新報 3:14、16、18、19</p> <p>▷ 都鳥英喜、日露戦争に応召、戦傷を負って退役、いく点かの戦争画を描く(6代高橋道八も従軍)。 京都工芸大観、京都洋画の黎明期</p> <p>▷ 京都から第3回太平洋画会展に、鹿子木孟郎の滞欧作、河合新蔵の作品、浅井忠の「グレーの近郊」・「仁王の図」、武田五一の作品が出品される。 美術新報 3:4、5</p> <p>▷ 富岡鉄斎、賀陽宮家の囁により「蓬萊仙境武陵桃源図」を描く。 鉄斎</p> <p>▷ 巨勢小石「出山釈迦」を描く。 落款</p> <p>この年ごろ</p> <p>▷ 萩原一羊、絵葉書流行の時潮にのり「日刊絵ハガキ」を刊行(浅井忠、鹿子木孟郎らこれに賛同して執筆、洋画趣味の鼓吹に一役果す)。 京都洋画の黎明期</p>	

参	考	日	本
(1)第9回新古典美術品展 受賞者	<p>1等賞、「桃珍波斯模様帯地」飯田新七</p> <p>2等賞、「桃花源」木島桜谷、「磁製驚猿」錦光山宗兵衛、「鳥磁白釉象眼花瓶」高橋道八、「窯変茶葉瓷花瓶」三浦竹泉、「巖上の松純銅円額」正阿弥勝義、「木地応用鯉魚衝立」戸島彌兵衛、「砂金織笹唐草鳳凰模様帯地」金田忠兵衛、「縞珍茶帯地」市田文次郎、「松に鷹四曲屏風」飯田新七、「玉椿製書棚」宮崎平七</p> <p>3等賞、「落花」細野契月、「晚秋」藤井蕙圃、「芦に鶏」上田万秋、「細雨」榎本芳華、「疎林暮月」八田青翠、「春郊」徳田麟斎、「祝戸開き」西山翠嶂、「鶴」阿部春峰、「田舎の秋」山田耕雲、「石膏都の花」小島満治、「同家路」浜田龜之助、「塑製懷古」横江臥龍、「薔薇花模様卓掛」山田香雨、「織物応用」田畑庄三郎、「白高麗彫刻筆筒」平岡利兵衛、「竜彫花瓶」俣野弁次郎、「桑葉形香炉」山本直治郎、「浜辺の図巻良箱」黒田帰一、「扇模様唐織」中村半兵衛、「色紙模様綴子帯地」喜多川平八、「幽禅御所解」岡島卯三郎、「獅子模様天鷲絨友禅壁掛」飯田新七、「塩瀬帯地」北岡亥之助、「柳に鶯二枚折屏風」田中利七、「藤象眼平卓」石本鐘斎、「竹製盛物籠」森田新太郎、「梅枝模様煙管」小山竹次郎。 京都美術協会雑誌 142</p>	<p>2・10 岡倉天心、大観・春草・六角紫水を伴って渡米。大観、春草はニューヨーク、ボストンなどで日本画の展覧会を開き、明38・4 渡欧、8月帰国、天心は翌年5月帰国、10月再び渡米、ボストン美術館東洋部長に就任。</p> <p>4・16 日本画家熊谷直彦、望月玉泉、今尾景年、野口小蕨、帝室技芸員となる。</p> <p>4・30～11・29 米国セントルイス万国博覧会開催。雅邦「春蒲秋林」、景年「花鳥」、満谷国四郎「節句人物」、岡田「舞子鼓打」、朝雲「小児の戯」など。5月岡倉天心、同博覧会学術講演会で「Modern Problems in Painting」と題して講演〔京都サロンを設置、京都より紹美栄祐、池田清助、三上治三郎、堀川新三郎、飯田新七、西村総左衛門、田中利七、錦光山宗兵衛、川島甚兵衛ら受賞。特に川島の綴錦賞讃される。「蒙古襲来図」(守住勇魚原図)巾1丈、長1丈3尺〕。 日出 11:20</p> <p>5・1～6・6 太平洋画会第3回展開催(浅井「グレーの近郊」、満谷「軍人の妻」、鹿子木孟郎「婦人肖像」、石井柏亭「草上之小憩」、新海竹太郎「賄賂」など)。</p> <p>9・22～11・12 白馬会第9回展開催、黒田清輝「大隈伯肖像」、藤島武二「蝶」、青木繁「海の幸」など。</p> <p>12・21 東京大学・早稲田大学・哲学館大学の出身者・学生ら・審美学会を設立、第1回大会を開催。</p>	<p>この年</p> <p>▷ 山本芳翠・寺崎広業・東城鉦太郎、日露戦争に画家として従軍、芳翠「唐家屯月下歩哨図」、東城「三笠艦上の東郷司令長官」など。</p> <p>▷ 日本陶器会社、欧風石炭窯を採り入れる。</p> <p>▷ 岡倉天心、『The Awakening of Japan』をニューヨークより出版。</p>
審査員兼鑑査員 審査長兼鑑査長 中沢岩太、審査幹事兼鑑査幹事 金子錦二	<p>絵画部(西洋画主任)浅井忠、(日本画主任)今尾景年、湯浅吉郎、原在泉、竹内栖鳳、菊池芳文、伊藤快彦、</p> <p>彫刻部(主任)旭玉山、浅井忠、神阪雪佳、</p> <p>織物部(主任)金子篤壽、神阪雪佳、西村治兵衛、飯田政之助、矢代庄兵衛、清水半兵衛、伊達虎一、鳥居喜兵衛、</p> <p>刺繍部(主任)西村総左衛門、谷口香嶠、飯田政之助、安田新造、小林久治郎、</p> <p>染物部(主任)西村治兵衛、鶴巻鶴一、谷口香嶠、富藤宇兵衛、廣岡伊兵衛、島村善助、</p> <p>漆器蒔絵部(主任)金子篤壽、神阪雪佳、西村彦兵衛、三上治助、富田幸七、木村表齋、</p> <p>陶磁器部(主任)藤江永孝、伊東陶山、河原徳立、谷口長次郎、清水栗太郎、</p> <p>七宝部(主任)並河靖之、武田五一、神阪雪佳、平野吉兵衛、</p> <p>金属部(主任)神阪雪佳、秦蔵六、正阿彌勝義、平野吉兵衛、</p> <p>各種工芸部(主任)河原徳立、谷口香嶠、神阪雪佳、旭玉山、碓井小三郎、岩永嘉兵衛、</p> <p>図案部(主任)武田五一、谷口香嶠、神阪雪佳、伊東陶山、伊達虎一、廣岡伊兵衛</p> <p>京都美術協会雑誌</p>	<p>▷(2)第3回関西美術会展 主な出品、(水彩)「冬の野」「冬の木」新井謙也、(水彩)「笠置山」「兜」「古器物」など中沢岩太、(油絵)「古武士」「老婦」、(水彩)「農婦」「春郊」「月ヶ瀬」浅井忠、(水彩)「春塘」「瀬田橋」牧野克次、(油絵)「メロスのヴィーナス」「肖像」「鴨緑江戦」鹿子木孟郎、「御幸図」田村宗立(なお宗立は文久年間の写生帖も展覧)。</p> <p>美術新報 3:16、京都美術協会雑誌 147</p>	

京	都	府
1・10 陶工 奥村松山没(享年64)。 湖東焼の研究		
1・22 山元春挙社中同政会展、京都花見小路有楽館に開催(出品22名)。 美術新報 3:22		
1・一 幸野樺嶺門凌雪会より月刊美術雑誌『画林』刊行(竹内栖鳳、菊池芳文、谷口香嶺、都路華香らが参加。1号~15号)。 栖鳳回顧展図録、日本美術年鑑 昭18		
3・3 日本画家 前田荷香没(享年73、京西川岡村無量院に葬る)。 京都名家墳墓録		
3・19 五条警察署、寺町通丸太町下石敢堂発行の裸体絵葉書を没収(これは石敢堂が浅井忠、武田五一から裸体人物写真を借り受け、絵葉書として複製刊行したうちのミケランジェロ作ヴィナス像である。警察署は風俗壊乱として告発、5・23罰金40円の有罪判決、なおこれに関する諸家の見解がいくつか発表される。竹内栖鳳(大阪毎日新聞)、武田五一(日出)、浅井忠(日出)、高木京都府警部長(日出))。 美術新報 75、78、日出 4・16		
3・一 滞米中の沢田宗山、コロンビア大学美術部で教鞭をとる(7月文部省より特例として東京美術学校卒業証書を交付さる)。京都工芸大観		
4・1~5・10 第10回新古美術品展覧会 ⁽¹⁾ 、岡崎町美術館に開催。 京都美術協会雑誌 154		
4・14 京都帝室博物館長森本後淵退職(青木成一奈良帝室博物館長心得、両館長心得となる)。 京都国立博物館70年史		
4・16 京都南画協会、南禅寺金地院に開く。 美術新報 4:2		
5・15 京都南画協会常設陳列所、寺町四条南入ル南画協会事務所内に設置する。 絵画叢誌 219		
5・18 前京都帝室博物館長森本後淵没(享年59、京極紫竹芳春院に葬る)。 京都名家墳墓録		
5・一 市立染織学校、工業学校規程により校則を改正(本科修業年限を4年、予科を廃止、高等小学校卒業を入学資格とする)。 実業教育50年史		
5・一 浅井忠、東宮御所御造営東二の間壁飾額面の図を囑託される(夏頃よりその準備に着手、12・20過ぎ下図を完成、翌明39・2本図に着手、5月完成、なお8月より間部時雄、霜鳥正三郎が製作の助手として採用される)。 浅井忠、京都工織大人文 9		
6・18 木島裕谷屏風展、御苑内元博覧会場に開く。 絵画叢誌 219		
7・3 京都高等工芸学校、第1回卒業証書授与式を挙行。 実業教育50年史		
9・一 黒田重太郎・西川純、聖護院洋画研究所に入る。 関西美術院入学証		
9・一 『京都美術協会雑誌』この月から『京都美術』と改題、第1号を発行(挿画「名妓吉野		

の遺品繡箔裂」「永田友治作鹿笛の硯蓋」「川島甚兵衛氏綴飾壁面の中の2」「埃及古代の木乃伊の布片を飾れる画」、論説、中川霞城「芸術は唯感情の表象に過ぎざるか」、高安月郊「今後の美術を如何にすべき」、工芸資料、徳永鶴泉「西洋美術史」、金子争青「蒔絵師永田友治」)。
同誌、日出 9・29

10・3 市立美術工芸学校囑託技師神阪雪佳、同校教諭に、囑託技手古谷紅麟および助手猪飼囃谷を同校助教諭に任命。
日出 10・1、府庁文書 明21-45

10・10~11・8 第4回関西美術会展⁽²⁾、岡崎公園美術館に開催(出品総数油絵100点、水彩300余点、墨絵100点、外国および会員肉筆の絵葉書なども展覧、中沢岩太、鶴巻鶴一、石川一、金子篤寿らの素人絵も陳列、特別室を設け鹿子木孟郎、田村宗立らの裸体画を展覧、この室入口には「一般入場を許さず、斯道研究の為に見らるる諸子のみ観覧を許す」と注意書がある)。
日出 10・11、12、19

10・22 関西美術会総会、岡崎町美術館に開催(聖護院町浅井宅を事務所とし、関西美術院創設を決定、発起人;伊藤快彦・都鳥英喜・小笠原豊涯・萩原一羊・鹿子木孟郎・田村宗立・牧野克次・浅井忠・桜井忠剛)。
日出 10・24、美術新報 4:16

11・14~23 京都後素協会展、岡崎公園美術館に開催(川北霞峰、細野契月、服部春陽、川村曼舟ら出品)。
絵画叢誌 223

11・一 田中善之助、聖護院洋画研究所に入る。
日本美術年鑑 昭和22-26、日本美術工芸 302

この年

▷ 秋、鹿子木孟郎、吉田中大路に移住、家塾室町の名なくなる(斎藤与里はこのころ埼玉県から入浴、鹿子木宅に寄寓しながら、聖護院洋画研究所に通う)。
日本美術工芸 301

▷ 神阪雪佳、天洋丸・地洋丸の2隻の内部各室を光琳風意匠で装飾。
京都工芸大観

▷ 友禅、元禄模様の流行。
西陣史

▷ 橋本関雪、日露戦争に従軍。
日本美術年鑑 昭19-21

この年ごろ

▷ 清水焼ドイツ式円筒窯、市立陶磁器試験場内に完成(国産レンガ造・円筒式・倒焰式・石炭窯)。
京都の明治文化財

▷ 初代龍村平藏、西陣に龍村製織所(龍村織物美術)を設立、以後独自の織物技術を研究。
日本美術年鑑 昭38

参	考	日	本
(1)第10回新古美術品展 受賞者	1等賞、「光琳様草花四曲屏風」飯田新七、「厚板織女帯地」清水半兵衛、「硯箱桐に鳳凰蒔絵」三上治三郎、「鉄仙花石象箱小函」旭玉山、「六歌仙花瓶一對」錦光山宗兵衛、「龍銀鍍起葡萄図花瓶」正阿彌勝義		4・16 関西美術会、競技会を大阪商品陳列所に開催(土品総数257点、審査長、辰野金吾、審査員、松岡寿、浅井忠、桜井忠剛、山内愚仙)。 日出 4・19
2等賞、「縞珍帯女帯地」市田文次郎、「原叟好茶室」平井竹次郎、「元禄模様朱珍織帯地」西村治兵衛、「花瓶盛上桐模様」服部唯三郎、「結晶釉花瓶」清水六兵衛、「青銅卷耳花瓶」溝口安之助	3等賞、「近藤重藏」細野契月、「三幅対掛物装潢」伏原利造、「秋草蒔絵短冊箱」田中彌兵衛、「箏」今村権七、「花組桐欄間」和田源兵衛、「菊模様朱珍織帯地」川那辺喜三郎、「金泥織女帯地」池田有蔵、「六珍果玉嵌入花瓶」三浦竹泉、「茶席待合」清水清兵衛、「紫檀製網代張器局」高木卯之助「花軍、雪軍」古谷紅麟、「桧に木兔一輪生」黒田婦一、「劇場引幕」岡田紫郊。 京都美術協会雑誌 154	4・18 書家 多田親愛没(天保11生)。 4・一~ ベルギー国リエージュ博開催。 府関係受賞者(大牌)錦光山宗兵衛、西村総左衛門、川島甚兵衛「百花百年の図」(4枚続きの巨大作)、飯田新七、三上治三郎、(名誉金牌)宇野仁松、京都扇子商会ら(以下略)。 5・一 『光風』創刊(白馬会機関誌、~明41・12=4巻2号)。 7・24 日本画家 川辺御橋没(天保8生、享年69年)。 8・3 日本画家 富岡永洗没(元治1生、享年42)。 9・23~10・28 白馬会創立10周年記念展開催、各作家の新作のほか旧作多数を併陳、和田三造「牧場晩帰」が白馬会賞受賞。 10・一 日本美術協会第38会展開催(上野美術協会)、川端玉章「桃林山水」、熊谷直彦「雪山山水」、村瀬玉田「白梅孔雀」など。 10・一 日本南宗画会創立。 11・3 太平洋画会研究所を東京下谷に新築し開所式挙行。 12・17 大同絵画会創立総会(上野公園三宜亭)、趣意書と石井天風、池上秀敏、尾竹竹坡らの評議員を定める。	
(2)第4回関西美術会展 主な作品(油絵)「秋林」「農夫」浅井忠、「舞妓」「加茂川眺色」「歩兵が戦線歩哨の図」「伊太利人の肖像」「少女」「マドモアゼル」鹿子木孟郎、「洛北の里子」「黄昏の園」伊藤快彦、「米国の景」吉田博、「村落」河合新藏、「樂しき黄昏」満谷国四郎、「春月の森の図」都鳥英喜。 日出 10・11、12、19			この年 ▷ 中村不折帰国、藤島武二・有島生馬・山下新太郎渡仏。 ▷ 夏、大阪難波新地に日本海大海戦のパノラマができる。(鹿子木孟郎をはじめ、都鳥英喜、伊藤快彦、西川純、黒田重太郎ら製作にあたる)。 日本美術工芸 302

京	都	府
<p>1・11 後素如雲社の新年発会式および新古画展覧会を祇園梅尾に開催(田能村直入「芙蓉」、富岡鉄斎「文章司令神画賛共」その他、小笠、小斎ら)。 1・12 川村曼舟、市立美術工芸学校教諭に任命される。 1・17 京都美術協会、「美術館新設の議に付具申書」を市参事会に提出。日出1・23、京都美術 1・28 山元春挙、社中同攻会成績品展覧会を花見小路有楽館に開催(山元春挙、川村曼舟、服部春陽、山下竹斎ら)。 2・24 関西美術院発起人らは中沢関西美術会会長を顧問とし関西美術院経営規則を定める。 2・25 鹿子木孟郎、住友家の給費を受け再び仏国留学に出発(ローランス画伯に師事、なお彼の門下生中、斎藤与里・伊庭伝治郎も同行する)。 3・2 関西美術院開院式、岡崎町広通冷泉上ルの同院に挙行(院長:浅井忠、顧問:中沢岩太、教授:伊藤快彦・都鳥英喜・鹿子木孟郎〔留学中〕、また田村宗立および生徒、芝千秋・梅原良三郎・田中喜作・加藤源之助・間部時雄・黒田重太郎・西川純・榊原一広・沢部清五郎ら20人が出席、のち6月中林樞が、7月山川瀧野・寺松国太郎らが入院。浅井忠聖護院洋画研究所はこれにより発展的解消となる。建物設計は武田五一)。 3・5 関西美術院、この日から授業を開始。(科目の主なもの石膏および人体の写生、美学および解剖学の講義など、なお男女区別せず)。 3・一 第一銀行京都支店本館完成〔明38・9着工、辰野金吾(工学博士)・葛西万司設計、辰野式(近世イギリス式)〕。 4・1~5・10 第11回新古美術品展、⁽¹⁾ 岡崎に開催。 4・8 南宗画家中西耕石の追福京都耕石遺墨展覧会開催。 4・一 関西美術院、院内競技会を開催。 4・一 松風陶器(資)設立、(洋式設備、最初は非常に苦境に陥いるが、のち成功)。 5・1 足立源一郎、市立美術工芸学校を退学し、関西美術院に入学願を提出。 5・13~15 凱施記念京都図案展、有楽館に開催(高田鶴州、岡田紫郊、吉岡華州、上野清江ら)。 5・19 日本画家 久保田米麿没(享年55、河原町二条北、高田別院に葬る)。</p>	<p>6・1 田能村直入、甲信越三州に旅行。 6・10 森寛齋遺墨展覧会を南禅寺金地院に開催。 6・13 書家 植松有経没。 6・一 日本銀行京都支店(現平安博物館)完成〔明36・9着工、辰野金吾(工学博士)・長野宇平治(工学博士)設計、辰野式(近世イギリス式)〕。 7・20 三吉教諭、川北、西山助教諭附添い絵画専攻科生徒、松宮(芳年)、平井(煤仙)、星野(空外)、絵画科4年村上(華岳)らを引率満韓地方を修学旅行、8・21帰校。 8・4 牧野克次、霜島正三郎とともに米国留学のため京都を出発(ニューヨークの美術学校で約半年間水彩画を教授、のち欧米各地を見学)。 8・26 九鬼隆一、京都倶楽部にて演説(「東京の美術家は時代思潮に駆られその思想は京都より進みたるが如きも、その技術に至りては京都遙かに勝れり」と)。 9・22~23 高島屋、ア・ラ・モード陳列会を河原町共楽館に開催(懸賞募集の絹着尺・女帯地・友禪裾模様の作品を展示)。 10・10~11・9 第5回関西美術会展、⁽²⁾ 岡崎町博覧会館に開催。 11・22 水曜会展覧会、旧京都倶楽部に開催(橋本関雪ら11点)。 この年 ▷ 友禪図案会、友禪協会と改称。近代友禪史 ▷ 滞来中、沢田宗山、マダム=バタフライの舞台装置を囑託され好評を博す。(またニューヨーク森村組の図案顧問を囑託される)。 ▷ 大丸北峰、支那醜陵県に設立された製陶学堂および公司から陶画部の教師として招かれる。 ▷ 友禪桃山模様が流行。 ▷ 細野契月、菊池芳文の養嗣子となり改姓する。 ▷ 山田芸艸堂、本田雲錦堂と合併、合名会社芸艸堂となる。 ▷ 大橋氏庭園完成(神阪雪佳、大橋正之助設計、築山林泉庭)。 ▷ 陶工3代中村東洗没。 ▷ 滞仏中の鹿子木孟郎、フランス・サロンに小女図を出品、入選。 ▷ 京漆園結成。 この年ごろ ▷ 美術工芸家・実業家の懇親団体桜柳会設立。</p>	<p>日出 大10・11・7</p>

参	考	日	本
(1)第11回新古美術品展 受賞者 1等賞、「烏帽子織女帯地」飯田新七、「厚板織女帯地」清水半兵衛、「塩瀬友禪染壁掛用群鶏図」島村善助、「金糸縮緬友禪染相思草」西村治兵衛、「交袖芒切透花瓶」錦光山宗兵衛、「初日出蒔絵手箱」三上幸三郎、「刺繡激流図四曲屏風」飯田新七、「蘭花蒔絵手箱」三上治三郎 2等賞、「奔馬」木島桜谷、「春興」川北霞峯、「石膏鹿」国安稲香、「陶製牛」錦光山宗兵衛、「牙彫籠持老人」池田清助、「牙彫姉弟」山中支店、「鉄鎚起兎」山田長三郎、「地変花鳥模様女帯地」市田文次郎、「縮緬翁竹模様女帯地」中村半兵衛、「楽器蒔絵広蓋」山本利一、「侶織友禪染桃山模様」岡本仙助、「倭錦春秋模様女帯地」金田忠兵衛、「刺繡孔雀図四曲屏風」田中利七、「羽二重三ツ重両棲模様」井上七右衛門、「七宝齒染模様花瓶」服部唯三郎、「牡丹蒔絵食籠」稲垣和三郎、「縮緬友禪染匹田鹿子七宝に鳥模様」野口安左衛門、「都織六歌仙模様女帯地」三宅清治郎、「綴錦夏模様卓掛」北岡玄之助、「真塗紗張会席家具」三上治三郎 3等賞、「栄華」細野契月、「鷺之図」山田耕雲、「瓜田」上田万秋、「杜鵑図」八田青翠、「花溪春雨図」佐野曠、「夏山欲雨之図」溪山秋露之図双幅「秦金石」、「休憩」建島彌一郎、「感奮」横江香雪、「休憩」北村西望、「塩瀬友禪染竹模様帛紗」沢渡源兵衛、「厚板有職模様女帯地」井上七右衛門、「金泥織女帯地」河那辺喜三郎、「塩瀬友禪染白書更砂蝶鳥模様広帯」林藤助、「紫壇彫刻机」池田儀助、「桐製机」西村巳之助、「佐保姫竜田姫図装飾品」古谷紅麟、「平和図装飾画」猪飼嘯谷、「褐色結晶釉花瓶」清水六兵衛、「縮緬毘沙門亀甲女帯地」熊谷市兵衛、「筑前博多織女帯地」三宅安次郎ら。	<p>日出 10・11、19~24</p>	<p>1・一 大下藤次郎、丸山晩霞、河合新蔵と日本水彩画会をおこし、水彩画研究所を設立。 2・3 高村光太郎、欧米留学に出発、ロンドンで萩原守衛、バーナード=リーチらと知りあう。 3・一 日本絵画会展開催(日本美術院主催)。 4・4 彫刻竹内久一、漆工白山松哉、彫金香川勝広、刀剣宮本包則、月山弥五郎、篆刻中井敬所、図案岸光景、帝室技芸員となる。 4・一 白馬会第6回展、太平洋画会第5回展開催。 4・一 美術院三人展開催、横山大観、菱田春草、西郷孤月の無線描法による研究新作で、大観20点、春草21点、孤月6点、いずれも英国における日本画展のための制作。 6・2 雪舟400年忌を井上馨の内田山の邸に催し、作品多数を陳列。 8・30 書家 黒川眞頼没。 9・6 日本美術院、規則を改正、第1部(絵画)を東京に、第2部(彫刻)を奈良に置く。12月頃、第1部は茨城県五浦の研究所に移る。天心に従って、大観、春草、観山、木村武山、同地に移住。 11・15 洋画家 山本芳翠没(嘉永3生、享年57)。 11・一 日本美術協会第40回展開催。1等賞、荒木寛敏「怒濤」、2等賞、川合玉堂「山水」、望月金鳳「鶏」、小堀鞆音「楠木訣別」など。 11・一 『書画骨董雑誌』創刊。</p>	<p>この年 ▷ 正木直彦、黒田清輝、大塚保治らは官設展覧会設立の建白書を牧野文相に提出。 ▷ 東京出身の若い画家たちによる江戸っ子会創立。 ▷ 勝田焦琴、カルカッタの美術学校で日本画を指導。 ▷ 大沢三之助、建築装飾研究のため英仏へ留学。 ▷ 岡倉天心、『The Book of Tea』を出版。</p>

京	都	府
1・21 南画家 田能村直入没(文化14・2・15生、享年94、神楽岡神葬墓地に葬る)。 京都名家墳墓録、直入居士伝		9・6 市立美術工芸学校、明年度2科増設のため、髹漆科準備調査委員を中村喜三郎に、刺繍科には小林久次郎に囑託することを市参事会で決定。 日出 9・7
1・一 沢田宗山、官命によりヨーロッパ・東インドを視察。 京都工芸大観		10・1 府立織物試験場、中郡吉原村に開所式を挙行。 峰山郷土史
3・17 鳩居堂熊谷正行没(享年65)。 京都 3・20		10・10~11・9 第6回関西美術会展、岡崎町博覧会館に開催〔(水彩)間部時雄「静江」、長谷川良雄「櫟林」、都鳥英喜「街路」、加藤源之助「寒林」、黒田重太郎「高瀬」、(油絵)梅原良三郎「花束」、寺松国太郎「夏の比叡」、萩原一羊「佳人」、伊藤快彦「田舎の道」、浅井忠「肖像」・「飛弾の高山」など、(工芸)浅井忠図案・杉林古香作「用箋箱木兎」、浅井忠図案・清水六兵衛作「菓子皿松の島」、神阪雪佳 図案・杉林古香作「ヌーボー一式模様菓子盆」など〕。 日出 10・16~25
3・一 鳳凰堂修理完成。 日出 3・11		10・25~11・30 第1回文展 ⁽²⁾ (竹内栖鳳「雨霽」、木島桜谷「しぐれ」、上村松園「長夜」など京都の画家は、ほとんど参加した)。日本芸術院史
4・1~6・10 第12回新古美術品展、 ⁽¹⁾ 岡崎に開催。 日出 5・11、19		11・1 毎年開催の市立美術工芸学校生徒製作品競技会は本年中止し、以後3月下旬に開催することに変更。 市立美工沿革略
4・14 南画協会10周年第20回大会大展覽会、南禅寺金地院・天授庵・真珠院などに開催。 日出 4・5		11・23 日本画家 浅井柳塘没(享年66、高倉五条下ル西念寺に葬る)。 京都名家墳墓録
4・14 橋本閑雪、神戸花岡町に從軍記念画展覧会を開く。 絵画叢誌 240		12・16 洋画家浅井忠没(安政3・6・21江戸挽町佐倉藩邸生、幼名忠之丞、号黙語・槐庭・木魚、享年52、南禅寺金地院に葬る)。 京都名家墳墓録、浅井忠、日出 12・17
4・15 田能村直入法会、万福寺に挙行(書画展覧を行う)。 日出 4・17		12・16 市立美術工芸学校評議員会、絵画専門学校建立の議を市に提出することを決定(28日提出)。 市立美工沿革略、府庁文書 明40-30
4・19 安井曾太郎・津田青楓、共に仏国留学のため京都駅を出発(津田は農商務省囑託として、安井はアカデミー・ジュリアンに入りローランスに師事、リュド・テアトルに住み12月パリ郊外ヴェイトリーに移住)。院内日誌、日本美術年鑑 昭31		12・17 中沢岩太、浅井忠逝去につき関西美術院長に就任。 関西美術院歴史概要
4・21 田能村小斎、小簗主催で羅漢供養会を建仁寺に開く(古人の仏画等も展覧)。 日出 4・23		12・一 契陶会、市立陶磁器試験場内に設立(会長九鬼隆一)。 藤江永孝伝、府誌下
4・26 市立美術工芸学校、同校規則を改正(専攻科を廃し研究生徒規程を定める)。 市立美工沿革略、市公告 122号		この年 ▷ 浅井忠、初代京都帝国大学総長木下広治の肖像を描く。日本美術工芸 302、京都洋画の黎明期 ▷ 初代諏訪蘇山、五条坂に開窯。 京都工芸大観
4・26 市立美術工芸学校教諭三宅呉暁休職(6・29退職)、後任として川北霞峰教諭となる。 市立美工沿革略		▷ 望月玉泉、「阿陽鳴門」を描く。 近代日本画名家図録
4・一 浅井忠、聖護院町から知恩院内信重院に移住。 京都洋画の黎明期		▷ 上阪雅人、東京へ移住、白馬会洋画研究所(太平洋画会研究所)に学ぶ。 日本美術年鑑 昭32
5・19 久保田米鶴追薦会、建仁寺専門道場に挙行。 日出 5・17		▷ 滞仏中の鹿子木孟郎、アカデミー・ジュリアンの競技に加わり1等賞牌を得る。 鹿子木孟郎小伝
6・9 伊藤快彦、快彦画会を木屋町井富楼・花外楼などに開催(油絵を日本室内の装飾に応用することを意図)。 日出 6・12		▷ 神阪雪佳、美術工芸研究会佳美会を創立(のち佳都美会と改称)。 雪佳遺作集
6・一 今尾景年、南禅寺天井画揮毫をはじめる。 日出 4・25		
6・一 市立美術工芸学校、応需製作に関する規定を定め、応請図案調製規則を廃止。 市立美工一覽 明45		
7・3 市立美術工芸学校、左京区吉田町に移転。 市立美工沿革略		
7・9 関西美術院、十日会を夜に開催(出席者32名、浅井忠「壁画について」講演、毎月開催)。 院内日誌		

参	考	日	本
(1)第12回新古美術品展覧会 受賞者 1等賞 「織物錦織広帯」清水半兵衛、「同松代織広帯」金田忠兵衛、「金華織広帯」西村治兵衛。 2等賞 「絵画春の歌」土田麦僊、「同田舎の秋」木嶋桜谷、「同きつつき」川北霞峯、「彫刻象牙置物」山中 吉郎兵衛、「陶磁器黄釉鳳花紋花瓶」三浦竹泉、「同木蓮浮彫花瓶」清水六兵衛、「七宝喇叭形花瓶」服部唯三郎、「蒔絵鯉図手箱」西村彦兵衛、「松図硯箱」稲垣和三郎、「織物金華織広帯」喜多川平八、「同綴錦広帯」北岡玄之助、「錦織広帯」市田文次郎、「縞珍広帯」中村半兵衛、「都織広帯」三宅清次郎、「染物草花模様友禅縮緬」下村正太郎、「同果物模様友禅縮緬」岡本仙助、「同桜花蝶模様友禅縮緬」野口 安左衛門、「歴史人形楠正行辨内侍を救う躰」大木平蔵。 3等賞 38名。 京都美術 8		1・一 『多都美』創刊(巽会発行、~大6・1=11巻1号)。 3・20~7・31 東京勸業博覧会開催(東京府主催、上野公園)、1等賞川合玉堂「二日月」、寺崎広業「王摩詰」、高島北海「水墨山水」、町田曲江「仏陀の光」、川端玉章「富士」、荒木寛敏「孔雀」、山岡米華「秋山閑居」、松本風湖「長年奉帝」、洋画では岡田三郎助「某婦人像」、長原孝太郎「停車場の夜」、中村不折「建国勲業」、満谷国四郎「戦の話」「かりそめのなやみ」、青木繁「わたつみのいるこの宮」など)。 5・一 日本装飾美術会設立。 5・一 石井柏亭、森田恒友、山本鼎ら、『方寸』創刊(美術文芸誌、~明44・7=35号)。 6・6 美術審査委員会官制公布(美術審査委員会は文部大臣の監督に属し、美術展覧会の出品を審議するもので、委員の任期は3年、委員長には文部次官が当たった。この制度は大8に廃止されるまで存続)、6・8美術展覧会規定が制定される。	
(2)第1回文展 I 審査委員(〇は京都の人) (学)松井直吉、(学)〇中沢岩太、(学)大塚保治、(学)塚本靖、(学)高嶺秀夫、(学)岡倉寛三、(学)今泉雄作、(学)藤岡作太郎、(学)中川忠順、(日)川端玉章、(日)荒木寛敏、(日)橋本雅邦、(日)寺崎広業、(日)下村観山、(日)〇菊池芳文、(日)〇竹内栖鳳、(日)野口小蘗、(日)〇今尾景年、(日)川合玉堂、(日)横山大観、(日)山元春挙、(日)松本机湖、(日)小堀軻音、(学)森鷗外、(洋)黒田清輝、(学)岩村透、(洋)〇浅井忠、(洋)松岡寿、(洋)久米桂一郎、(洋)岡田三郎助、(洋)和田英作、(洋)中村不折、(洋)小山正太郎、(洋)満谷国四郎、(彫)高村光雲、(彫)石川光明、(彫)竹内久一、(彫)長沼守敬、(彫)白井雨山、(彫)新海竹太郎、(彫)新納忠之介、(彫)大熊氏広。 審査員出品(京都関係のみ) 「雨霽」竹内栖鳳、「海月」山元春挙、「春秋花鳥」菊池芳文、「武人狩獵の図」浅井忠。	8・13 文展(文部省美術展覧会)審査員を任命。 8・14 日本美術協会・日本画会・日本南宗画会などの有力会員、文展審査員選考を不満として正派同志会を結成。 9・1 日本美術院・大同絵画会・二葉会・紅児会・鳥合会などの会員、国画玉成会の創立総会を開く(会長岡倉天心)。 10・25~11・30 第1回文展開催(上野公園)、日本画、川端玉章「木下閻」、菊池芳文「春秋花鳥」、横山大観「二百十日」、竹内栖鳳「雨霽」、寺崎広業「大仏開眼」、2等賞、菱田春草「賢首菩薩」、野田九甫「辻説法」、木島桜谷「しぐれ」、洋画、黒田清輝「白芙蓉」、満谷国四郎「購夢」、浅井忠「武士の山狩」、岡田三郎助「高橋義雄氏肖像」2等賞は和田三造「南風」、彫刻、新海竹太郎「ゆあみ」「露宮」。		
II 受賞者(京都関係のみ) 日本画、2等賞「しぐれ」木島桜谷、3等賞「長夜」上村松園、「広寒宮」西山翠嶂、「曉風」服部春陽、「石清水」都路華香、「まみず汐水」榎野南陽、「白熊」西村五雲、「山嬬」谷口香嶠、「晩秋」川北霞峯。 日本芸術院史		11・一 山崎朝雲、米原海雲、平櫛田中ら日本彫刻会を結成(会長岡倉天心)。 この年 ▷ 東京府立工芸学校創立。 この年ごろ ▷ 山本鼎を中心に創作版画の運動徐々にめばえる。	
入選 第1部日本画 「海に鴛鴦」三宅呉暁、「瀑布」西井敬岳、「加茂川の朝」松宮芳年、「冬の日」上田万秋、「海辺」庄田鶴友、「長閑」田中一華、「日毎の友」泉輝月、「鹿」里村対岳、「秋溪細雨」高瀬春暁、「宮苑の朝」平井椋仙、「夕月」山内信一、「山家の春」小野竹橋、「鹿」岡本芳水、「夕月」入江波光、「俊寛」井村方外、「春暖」菊池契月、「夏山欲雨」徳田隣斎、「熊」疋田芳沼、「悠忽光陰」池田桂仙、「茶屋の花」長嶺信、「進言」渡辺公観、「青嵐」阿部春峰。 帝國絵画宝典			

京	都	府
<p>1・一 沢田宗山帰国、のち沢田図案所を旧住 狹屋町二条に開設(また日本製布・大丸・京都織 物などの図案顧問を囑託される)。京都工芸大観 1・一 鹿子木孟郎、仏国から帰国、京都高等 工芸学校講師となる。鹿子木孟郎小伝</p> <p>2・一 太田喜二郎、東京美術学校卒業に先だ ち渡欧(ベルギーのガン市立美術学校に入学、そ のかたわらエミール・クラウスについて学ぶ)。 太田喜二郎遺作展図集、京都洋画の黎明期</p> <p>3・1 3代松風嘉定、新工場で洋式倒焰式円 窯の焼成をはじめる。松風嘉定</p> <p>3・20~21 市内洋画・日本画大家の生徒の組 織する嚮会、東山芭蕉庵に開催(洋画10点、日本 画10点、応用図案画220点出品)。日出 3・21</p> <p>3・21 田中喜作、日出新聞にロダンについて 連載。同上</p> <p>3・23 浅井忠遺作展、南禅寺金地院に開催 (主催黙語会、日本画「鳳凰」・「老子」・「山姥」 洋画「早曉海上図」など)。日出 3・23</p> <p>3・25 京都市立美術工芸学校校舎竣工式、移 転式を挙行(生徒作品陳列と教授の寄附画を展観、 「松に鹿」菊池芳文、「花卉」谷口香嶽、「四季風 景」竹内栖鳳、「雪松」山元春挙などの屏風と扇 面)。日出 3・26</p> <p>3・26~29 市立美術工芸学校生徒製品競技会 を開催(「未枯」村上華岳、「宵の春」入江波光な ど)。市立美工治革略、日出 3・28</p> <p>3・一 京都刺繍同業組合、市立美術工芸学校 に刺繍科新設の建議書を市予算委員会に提出(組 長 西村総左衛門、副組長 小林久次郎、飯田新 七、田中利七の連署、予算委員会否決)。 日出 41・3</p> <p>4・1~5・10 第13回新古美術品展、⁽²⁾ 岡崎 美術館に開催。日出 5・11</p> <p>4・9 蒔絵師 山本利兵衛没(嘉永7・2・4 京都生、享年70、真如堂に葬る)。 京都名家墳墓録、名家歴訪録</p> <p>4・12 田能村直入年祭(永楽堂、天授庵等に 遺作墨展観)。日出 3・5</p> <p>4・一 富岡鉄斎、「安倍仲麿明州望月図」「群 仙高会図」を制作、宮中に納める。鉄斎</p> <p>5・20 市立美術工芸学校、規則を改正、入学 資格を定め、描金科を漆工科に復し予科を設置。 市立美工治革略、市公告168号</p> <p>5・一 関西美術院幹事千種掃雲辞任、かわっ て寺松国太郎が就任。関西美術院歴史概要</p> <p>5・一 梅原良三郎、田中喜作とともに渡欧。 京都洋画の黎明期、関西美術院歴史概要</p> <p>6・15 関西美術院々長中沢岩太退任、かわっ て鹿子木孟郎が院長に就任。 関西美術院歴史概要</p>	<p>7・23 機業家 佐々木清七没(弘化1生、享 年65、超勝寺に葬る)。 日出 7・27、京都名家墳墓録</p> <p>9・一 関西美術院、寺松国太郎に教授を囑託。 関西美術院歴史概要</p> <p>10・10~11・9 第7回関西美術会展、岡崎町 美術館に開催(黙語室を設け、浅井忠の遺作を陳 列、出品分類は例年どおり、小品が大多数、鹿子 木孟郎「舞子」・「虚無僧」・「直入肖像」・パリ留 学中の習作、都鳥英喜「磯」、伊藤快彦「処女」、 足立源一郎「若葉」、その他黒田重太郎・石井柏 亭・新井謹也など出品)。日出 10・15~18</p> <p>10・15~11・23 第2回文展⁽¹⁾(竹内栖鳳「飼 われたる猿と兎」山元春挙「雪松図」土田麦僊 「罰」、村上華岳「驢馬に夏草」など)。 日本芸術院史</p> <p>11・5 西陣織物同業組合、染織場を烏丸上立 売に設立開業(大5・10市に移管)。 市染織試験場要覧</p> <p>11・14~15 七画伯製作展覧会、寺町四条上ル 大雲院に開催(井筒観樂堂主催、鈴木松年、今尾 景年、望月玉泉、富岡鉄斎、竹内栖鳳、山元春挙、 木島桜谷の7名、東京より川端玉章、寺崎広業、 荒木寛政、川合玉堂の画も出品)。日出 11・6</p> <p>11・18 市立美術工芸学校長上田正当没。 市立美工治革略</p> <p>11・一 表具師 9代奥村吉兵衛没(号義道、 享年68)。淡交テキスト 茶道具編</p> <p>12・21 荒木矩、市立美術工芸学校長事務取扱 となる。市立美工治革略</p> <p>12・22 和田智満没(享年75、西加茂小谷に葬 る)。 京都名家墳墓録</p> <p>この年</p> <p>▷夏 安井曾太郎、津田青楓とともにグレーに 遊びグレー風景を描く。日本美術年鑑 昭31</p> <p>▷ 2代川島甚兵衛、「からにしき 百花窓掛」 を製作(幅125cm、長さ353cmの大作)。 京都の明治文化財</p> <p>▷ 3代田畑喜八、「老松図友禅染着色」を製作。 同上</p> <p>▷ 八木一舛、はじめて大阪染師吉向松月に ついて陶法を学ぶ。京都工芸大観</p> <p>▷ 初代諏訪蘇山、白磁の研究に成功。同上</p> <p>▷ 河村蜻山、遊陶園に加入。同上</p> <p>▷ 真々庵庭園完成(染谷寛治、小川治兵衛 (造園師)設計、築山林泉庭)。京都の明治文化財</p> <p>▷ 京都精金会設立。</p> <p>この年ごろ</p> <p>▷ 田村宗立、知恩院内光玄院に移る。 京都洋画の黎明期</p> <p>▷ 西陣織、今春織があらわれる。変織の流行 西陣史</p>	

参	考	日	本
(1)第2回文展(京都関係のみ)	審査員 中沢岩太、鹿子木孟郎、竹内栖鳳、菊 池芳文、今尾景年、山元春挙	1・13 日本画家 橋本雅邦没(天保6生、亨 年74)。	
審査員出品「ノルマンディーの海辺」「ローラ ンス画伯の肖像」鹿子木孟郎、竹内栖鳳「飼われ たる猿と兎」「春苑、宿鶉」菊池芳文「雪松図」 山元春挙	審査員出品「ノルマンディーの海辺」「ローラ ンス画伯の肖像」鹿子木孟郎、竹内栖鳳「飼われ たる猿と兎」「春苑、宿鶉」菊池芳文「雪松図」 山元春挙	2・14 荻原守衛(明34渡米、同36渡仏)帰国、 ロダンの作風を伝える。	
受賞者(日本画) 2等賞、「名士弔喪」菊池契 月、「勝乎敗乎」木島桜谷、3等賞、「月かげ」上 村松園、「竹径春浅」川北霞峰、「諸神欲呼」都路 華香、「閑庭」上田万秋、「秋郊」山田耕雲、「罰」 土田麦僊、「秋ばれ、夕ざめ」阿部春峰、「秋山薄 暮」徳田隣斎、「驢馬に夏草」村上華岳、「黄昏」 川村曼舟、「寒林暮靄」田近竹邨。日本芸術院史	受賞者(日本画) 2等賞、「名士弔喪」菊池契 月、「勝乎敗乎」木島桜谷、3等賞、「月かげ」上 村松園、「竹径春浅」川北霞峰、「諸神欲呼」都路 華香、「閑庭」上田万秋、「秋郊」山田耕雲、「罰」 土田麦僊、「秋ばれ、夕ざめ」阿部春峰、「秋山薄 暮」徳田隣斎、「驢馬に夏草」村上華岳、「黄昏」 川村曼舟、「寒林暮靄」田近竹邨。日本芸術院史	8・3~8 第3回万国美術会議、ロンドンに 開催。図画および美術教授法の改良ならびに、そ れらを工業に応用するについての万国美術会議 (International Art Congress for the Deve- lopment of Drawing & Art Teaching & their Application to Industries)。	
入選(日本画)	入選(日本画)	8・24 高島得三ほか6名、文部省美術審査委 員となる。	
「鉄嶺城外の宿雪」橋本関雪、「竹径春浅」川北 霞峰、「椋鳥」三宅呉暁、「木の間の流」「雨の暮」 中居曠谷、「月かげ」「梅溪訪友」「日暖風柔」池田 桂仙、「雨の渡船」鈴木華陽、「うた寒」加藤英舟、 「晩春」平井楳仙、「伏見の朝」江口鸚洲、「廃寺 の秋」岡本蕉雨、「落照」小野竹橋、「秋溪」庄田 鶴友、「虎」村瀬秀月、「雨の夕」西井敬岳、「う みべ」高瀬春暁、「楓橋夜泊」村松雲外、「日盛り」 吉川耕雲、「春の日」松宮芳年、「春の山」星野空 外、「涼蔭」森月城、「夏の小川」八田青翠、「秋 山薄暮」徳田隣斎、「転迷開悟」西山翠嶂、「閨愁」 猪飼嘯谷、「小供心」疋田芳沼。帝国絵画宝典	8・一~11・一 ベテルスブルグ万国装飾技術 および家具博覧会開催(京都より田中利七、西村 総左衛門、飯田新七ら大賞を受賞)。		
(2)第13回新古美術品展覧会	受賞者	9・21 フェノロサ、ロンドンで客死(1853・ 2・18米国生、享年55)。	
1等賞、「佳良織広帯」伊達虎一、「松代織広帯」 金田忠兵衛、「薔薇彫艶消鉢花瓶」清水六兵衛	1等賞、「佳良織広帯」伊達虎一、「松代織広帯」 金田忠兵衛、「薔薇彫艶消鉢花瓶」清水六兵衛	9・29 片山東熊、高山幸次郎設計の表慶館 (東京帝室博物館構内)成る。	
2等賞、「緑陰」川北霞峰、「故園花」菊池契月、 「白磁彫花瓶」三浦竹泉、「蒔絵重箱」稲垣和三郎、 「二重硯箱」木村秀雄、「門式菓子箱」迎田秋悦、 「綴錦広帯」十合重助、「糸錦織広帯」喜多川平八、 「糸錦織広帯」市田文次郎、「朱珍織広帯」中村半 兵衛、「刺繍各種」田中利七、「亀甲細工各種」二 枝貞次郎	2等賞、「緑陰」川北霞峰、「故園花」菊池契月、 「白磁彫花瓶」三浦竹泉、「蒔絵重箱」稲垣和三郎、 「二重硯箱」木村秀雄、「門式菓子箱」迎田秋悦、 「綴錦広帯」十合重助、「糸錦織広帯」喜多川平八、 「糸錦織広帯」市田文次郎、「朱珍織広帯」中村半 兵衛、「刺繍各種」田中利七、「亀甲細工各種」二 枝貞次郎	10・15~11・23 第2回文展。栖鳳「飼われ たる猿と兎」、山元春挙「雪松園」、中川八郎「北国 の冬」、山本森之助「曲浦」、満谷国四郎「車夫の 家族」、鹿子木孟郎「ローランス画伯の肖像」、荻 原守衛「文覚」など、受賞者は2等賞菊池契月ほ か4名、3等賞上村松園ほか37名であった。	
3等賞、「悲秋」森月城、「旅いそぎ」疋田芳沼、 「春宵」小野竹橋、「秋の夜」上村松園、「和泉」、 「細雨」山田耕雲、「溪山豊雨」服部五郎、「窓掛 春の花」青木幸次郎、「壁掛牡丹」奥西覚造、「石 膏婦人胸像」毛利武、「葛透し花瓶」宇野仁松、 「赤絵一輪生」石野龍山、「鯛懸花瓶」服部唯三郎、 「鉄銚子」雨宮宗七、「香簞筥」西村彦兵衛	3等賞、「悲秋」森月城、「旅いそぎ」疋田芳沼、 「春宵」小野竹橋、「秋の夜」上村松園、「和泉」、 「細雨」山田耕雲、「溪山豊雨」服部五郎、「窓掛 春の花」青木幸次郎、「壁掛牡丹」奥西覚造、「石 膏婦人胸像」毛利武、「葛透し花瓶」宇野仁松、 「赤絵一輪生」石野龍山、「鯛懸花瓶」服部唯三郎、 「鉄銚子」雨宮宗七、「香簞筥」西村彦兵衛	10・15 国画玉成会、展覧会開催、下村観山 「大原御幸」、今村紫紅「時宗」、安田靱彦「守屋 大連」、前田青邨「囚われたる重衛」など。	
4等賞、「雨あがり」徳田隣斎、「春雨」庄田鶴 友、「春花」阿部春峰、「宵の春」入江波光、村上 華岳ら53人。日出 5・11	4等賞、「雨あがり」徳田隣斎、「春雨」庄田鶴 友、「春花」阿部春峰、「宵の春」入江波光、村上 華岳ら53人。日出 5・11	12・12 木下奎太郎、北原白秋、石井柏亭ら 「パンの会」を結成、文壇美術界に新しい気運が 漲る。	
		この年	
		▷ 本多錦吉郎編『洋風美術家小伝』がなる。	
		▷ 速水御舟、松本颯湖の門に入る。	

京	都	府
1・12 京都市立美術工芸学校評議員会は芸術に関する専門教育機関設置にこたえ絵画専門学校設立を文部省に申請する。 同窓会名簿		4・17 南禅寺法堂再建(田中文弥、釈迦三尊像を製作)。 京都の明治文化財
1・19 金工 正阿弥勝義没(天保3・3 岡山津山生、享年77)。 名家歴訪録、絵画叢誌 261		4・20 中井宗太郎、市立絵画専門学校の講師となる。 府庁文書 明42-37
1・一 霜鳥正三郎、ニューヨーク市アメリカン博物館に技術員として就職、かたわら同市アカデミー オブ デザイン夜間部に学ぶ。 京都洋画の黎明期		4・23 市立美術工芸学校教諭竹内栖鳳は京都市立絵画専門学校教授に転任、同菊池芳文、谷口香嶺、山元春挙は市立絵画専門学校教授兼任となる。 市立美工沿革略
2・14 美術記者、金子静枝没。 日出 2・14		4・一 田中喜作帰国、のち東京に移住。 関西美術院歴史概要
2・22 富田溪仙、台湾および清国漫遊に出発。 日出 2・22		5・5 市立絵画専門学校第2学年編成を文部省認可(入江波光、村上華岳、榊原紫峰ら第2学年に編入学、選科に土田麦麩、小野竹橋らが入学する)。 府庁文書 明42-37
2・25 高島屋3代飯田新七没(享年58、名新兵衛、同100年史では3・25)。 高島屋135年史		5・15 京都商品陳列所、岡崎公園に設立、この日開所式を挙(工芸産業発展のため各種の展覧会・講演会を開く)。 京都貿易史
3・15 丙午画会展、裏寺町妙心寺に開催(芝千秋「清水・醍醐・深草のスケッチ」、小川千鸞「達磨」「冬枯」「五月」、徳永鶴泉「青物屋」「電車」など)。 日出 3・16		5・20 後素協会展覧会。 京都美術 16
3・21 半襟図案展、大雲院に開催(審査員、和泉忠兵衛、細田善兵衛、大橋孝七、宮本儀助、古谷紅麟ら、1等古谷社中静枝ら)。 日出 3・23		5・一 京都大学文科大学哲学科に美学美術史講座が設置される(心理学講座担任の松本亦太郎教授が事務と学生の指導にあたる。また西洋文学講座担任の藤代禎輔教授が美学を講義、武田五一、滝精一、浜田耕作ら各講師により西洋および東洋の美術史が講ぜられる)。 京都大学70年史
3・24 文部省、市立絵画専門学校設置を認可。 府庁文書 明42-37、同窓会名簿		6・一 安井曾太郎、津田青楓と共にフロモンビル村に遊ぶ(7月更に藤川勇造を加えて3人でオーヴェルニュ・ビルロング村に遊ぶ、作品に「田舎の寺」などある)。 日本美術年鑑 昭31
3・一 京都高等工芸学校教授萩原清彦、中沢岩太の紹介により西陣織物模範工場顧問を兼ねる。 日出 3・25		6・一 東本願寺財政整理のため宝物を売立つ。 日本絵画史
3・一 幸野樺嶺『樺嶺画鑑』刊行。 樺嶺遺墨		6・一 高島屋、大阪北浜帝国座のこけら落しの緞帳を製作(都路華香原図、ピロード友禪「天の岩戸ひらき」)。 高島屋135年史
3・一 栖鳳塾研究会が改革される。 日出 3・28		7・1 市立絵画専門学校開校式を挙(同窓会名簿)
3・一 斎藤与里帰国、のち東京に移住。 関西美術院歴史概要		8・8 京都美術協会、第3回美術功労者表彰式を市議事堂で挙(受賞者は次の18人、望月玉泉、竹内栖鳳、菊池芳文、谷口香嶺、山元春挙、都路華香、神阪雪佳、旭玉山、下村正太郎、清水半兵衛、金田忠兵衛、田中利七、清水六兵衛、三上治三郎、三上幸三郎、故金子錦二、故上田正当、故正阿弥勝義)。 京都美術 17
4・1 京都市立絵画専門学校創立、吉田町の京都市立美術工芸学校を仮用し授業を開始。 同窓会名簿、府誌下		10・8~10 文麟翁遺墨展、上野公園美術協会に開催。 絵画叢誌 270
4・1 府立図書館岡崎に開館(2日~4日美術図書展覧会を開催)。 日出 3・6		10・10~11・9 第8回関西美術会展、岡崎町博覧会館に開催(寺松国太郎「眠れる女」、伊藤快彦「木曾の秋」、沢部清五郎「梳」、鹿子木孟郎「浅間山」、田中善之助「三月の末」、池田治三郎「夕陽」、その他千種掃雲・小川千鸞・新井謹也ら出品)。 日出 10・12~28
4・1~5・10 第14回新古今美術展覧会、 ⁽²⁾ 岡崎に開催。 京都美術 16		
4・3~5 宮崎家具店、箆笥および鏡台の図案募集作品および、それによる製作家具の陳列展を開催。 日出 3・24		
4・12 菊池契月・西村源次郎、市立美術工芸学校教諭心得となる。 市立美工沿革略		
4・16 市立美術工芸学校助教諭西山翠嶂・合田一覚、京都市立絵画専門学校助教諭となる。 同上		
4・17 中沢岩太、市立美術工芸学校評議員を辞任。 同上		

参	考	日	本
(1)第3回文展(京都関係のみ)	審査員 中沢岩太、鹿子木孟郎、竹内栖鳳、菊池芳文、今尾景年、山元春挙 審査員出品 「あれ夕立に」竹内栖鳳、「織月」菊池芳文、「塩原の奥」山元春挙、「新夫人」「妙義山」「浅間山中」鹿子木孟郎 受賞者 日本画、3等賞、「細雨空濛」田近竹邨、「悪者の童」菊池契月、「和楽」木島桜谷、「浦の夕」川北霞峰、「山村暮靄」川村曼舟、「牧童」足田芳沼、「没落」平井樺仙、褒状、「後苑」阿部春蜂、「牛小家の夕」高橋菱雨、「花見」西山翠嶂、「寂寥」高瀬春暎、「獅子」望月青鳳、「花屋の庭」古谷藤三、「八百屋のかど」人見勇一、洋画、褒状、「真夏の山毛櫨」河合新蔵、「山村」都鳥英喜。 日本芸術院史	4・一 英人バーナード=リーチ来日、大9年帰国。 6・10 文部省の美術展覧会規程の全文改正。 9・9 川端玉章主宰の川端画学校開校式、1913(大3)洋画部が設けられ、藤島武二、9・11から授業を始める。 9・30 篆刻家、中井敬所没(天保2生、享年79)。 10・15~11・24 第3回文展、上野竹之台に開催、竹内栖鳳「あれ夕立に」、寺崎広業「溪四題」、菱田春草「落葉」、横山大観「流灯」、黒田清輝、「鉄砲百合」、岡田三郎助「大隈伯爵夫人肖像」、石橋和訓「美人読詩」、山脇信徳「駐車場の朝」、中沢弘光「おもひで」、山本森之助「濁らぬ水」など。受賞者は、2等賞菱田春草ほか4名、3等賞小室翠雲ほか21名、褒状鈴木華邨ほか41名であった)。 12・15 竹久夢二、『夢二画集』春の巻刊(夏、花、旅、秋、都会の巻など続刊、~明44・11・21)。 この年 ▷ 斎藤与里は太平洋画会に新傾向の作品を発表して注目される。	
入選 第1部日本画 「三方」八田青翠、「踏険集利」玉舎春輝、「秋溪」西井敬岳、「田舎の秋」高山春陵、「あさものいち」岡本焦雨、「京のまんなか」松村梅叟、「雲村の夕」佐野有年、「緑雨霜葉」由多耕雲、「夏のむら」西村秀岳、「大灯国師図」猪飼嘯谷、「五月雨」榊原苔山、「手向」松浦翁雪、「牛小屋の夕」高橋美雨、「祇園祭」松宮芳年、「伏見の烟雨」井口華秋、「動物園の猿」榊原紫峰、「見世物」森月城、「雨」上田萬秋 第2部洋画 「大原女」寺松国太郎 第3部彫刻 なし。 絵画叢誌 270			
(2)第14回新古今美術品展覧会	受賞者 1等賞、「糸錦広帯」喜多川平八、「蒔絵手箱」三上幸三郎。 2等賞、「達磨」菊池契月、「徴税日」土田麦麩、「水指」清水六兵衛、「花卉花瓶」諏訪蘇山、「浪蒔絵硯箱」稲垣和三郎、「丸形硯箱」木村秀雄、「蒔絵文台硯」田中彌兵衛、「白地唐織広帯」中村平兵衛、「糸錦広帯」市田文次郎、「糸錦広帯」篠屋機業店、「塩瀬友仙帯」池垣文次郎、「刺繡額」田中利七、「鼈甲巻簾入」二枝貞次郎。 3等賞、「獅子」木島桜谷、「春暖」山田耕雲、「柳桜」上村松園、「縁日」森月城、「すそ野」足田芳沼、「微風」廣江霞舟、「春暖」榊原紫峰、「梅日和」福本古葉、「竹林山水」山田介堂、「落飾」西堀刀水、「明恵上人春日に詣づ」平井樺仙、「溪間細雨」高瀬春暎、「夏雨」満岡鳴泉、「裝飾		

京	都	府
10・15～11・24	第3回文展 ⁴¹ (竹内栖鳳「アレタ立に」、山元春拳「塩原の奥」などがある。土田稜「雨後の孟宗竹」は落選)。日本芸術院史	古川雅喬、福岡玉圃、古谷雪山、川村華亭ら。 近代友禪史
10・25	陶工 14代永楽得全没(嘉永6生、幼名常次郎、享年57、未亡人14代永楽を襲名)。日本美術工芸 35	▷ 岡崎公園美術館、平安神宮拡張のため神宮東の地から仁王門通り疏水端に移築拡大(2階建534坪、明44から第1勸業館と改称される。なお同時に市立商品陳列所が庭園をはさんで西側に竣工する。昭6大札記念美術館建設により取毀された)。京都博覧協会史略
10・27	大和絵画家 小沢文隆没(享年68)。京都美術 18	▷ 関西美術院入学者、池田治三郎、三井文二。入学証および履歴書
10・—	京都図案会に属する青年図案家ら多年の積弊に堪えず同会を脱退、関西図案会を設立。近代友禪史、日出 10・13	▷ 友禪、新光琳文様・新有職文様が流行(明42～43)。友禪の変遷
11・23	京都精金会主催、正阿弥勝義追善会を南禅寺金地院に開催。京都美術 18	▷ 竹内栖鳳、大原三千院本堂の襖絵揮毫する。日本美術年鑑 昭18
11・28	現代名家百幅画会、高島屋烏丸店に開催。同上	
11・—	京都表具商組合第1回競技会開催(組合は伏原春芳堂、山田永昌堂などの首唱により春結成。競技会は表展と称され以後毎年開催、第2次大戦中は中断、戦後復活)。日出 9・5	
11・—	市立美術工芸学校の図案家・卒業生ら美工会を設立。日出 明43・2・25	
12・9	私立京都美術肖像画学校、府より設立認可、柳馬場通御池南入ルに設立(設立者〔校長〕吉田寛、修業年限2カ年、明45・5・1現在、男9人、女2人)。府庁文書 42-47	
12・14	橋本伝藏、藍綬褒章を受章(西陣繻子織新織法案出などの功績による)。西陣織物館記	
12・20	日本画家 榊原文翠没(享年86、清水山下墓地に葬る)。京都名家墳墓録	
12・27	山本竹雲追善会、南禅寺天授庵に開く。京都美術 18	
12・31	南画家 田能村小斎没(弘化2・10・10生、享年65、東山神楽岡に葬る)。京都名家墳墓録、日出 明43・1・5	
12・—	市立美術工芸学校校友会図案部、第1回研究会を開催(課題の図案につき、審査ならびに相互批評をし、優等品には奨励金を与える。図案はすべて新町通綾小路岡島商店が譲り受ける)。日出 明43・1・21	
この年		
▷ 初代伊東陶山、店と工場を祇園町より白川橋畔へ移す(以後もっぱら美術的作品を製作)。京都工芸大観		
▷ 2代川島甚兵衛、「鶴之図天井張」(長さ1丈3尺、幅4丈8尺)を完成。		
▷ 山元春拳塾同攻会を早苗会と改称する。早苗会解散通知状		
▷ 京都図案会事務長高坂三之助、京都図案会脱会者および他の賛同者らと無名会を設立(鈴木紫陽、湯田竹念、永田大湖、馬澄文州、水上香邨、		

参	考	日	本
画	岐美竹涯、「青華花瓶」三浦竹泉、「菓子皿」河村蜻山、「七宝両口形花瓶」稲葉七穂、「鳥銅花瓶」黒田婦一、「蒔絵硯箱」吉田平三郎、「ゴブラン織広帯」龍村平藏、「鹿子織九寸帯」三宅清次郎、「御幸織広帯」熊谷呉服店、「友仙染ナイヤガラ額」太田平助、「塩瀬友仙琴袋地」井上清三郎、「縮緬友仙」十合呉服店、「同断」井上呉服店、「同断」内藤合名会社、「変織友仙帯」岡本仙助、「縮緬友仙」野口安左衛門、「縮緬友仙」安藤合名会社、「友仙染富士の額」北村由吉、「蒔絵桐手篋筒」宮崎平七、「桜狩人形」大木平藏、「支那式籠花生」森田新太郎、「荒組竹籠花生」山田彌三郎、「鼈甲芝山人櫛笄」山口甚八、「朱子広帯」北岡玄之助、「縮緬半衿」荒川益次郎。京都美術 16		

京	都	府
<p>1・9 無名会、初会合を上塔之段、藤井寅一宅に開催（同会は毎月1回1人が講演、その話題について出席者が討論批評を行なう美術批評家の団体。この日の出席者は徳永鶴泉、田中喜作、中井宗太郎、真下飛泉、川北霞峰、北垣静処、田畑秋濤、千種掃雲など約20人。中井宗太郎が近代思想の文芸美術におよぼす傾向一般を講演、後に討論する。以後の例会には土田麦麿、秦テルヲも参加明45春ごろまで開催）。日出 1・11、明45・6・21</p> <p>1・15 丙午画会、裏寺町妙心寺に開催。 日出</p> <p>1・29～30 後素協会第2回小品展、京都倶楽部に開催（三宅呉眺、猪飼嘯谷、川北霞峰、阿部春峰、西山翠嶂、今尾景年、都路華香、菊池芳文、菊池契月、土田麦麿ら出品）。 日出 1・30、京都美術 19</p> <p>2・11 桃花会展覧会第1回展、寺町仏光寺下ル空也寺に開催（市立美術工芸学校卒業生の組織、「日熊」榊原佳山、「架橋」松宮芳年、「花の洞」佐野有年、「芭蕉」岡本蕉雨、「朝」平井樞仙、「牡丹」合田一峯、「晴れの夕」山内臥雲、「自由と束縛」「春水」西堀刀水、「春寒」紫原魏象ら出品、以後の例会には村上華岳も参加）。日出 2・13</p> <p>2・13 関西美術院、第2回競技会を院内に開催（油絵、水彩、漫画、デッサン、鉛筆画など計70余点、受賞者：1等「雪」（油絵）田中善之助、「男か女か」（漫画）井垣嘉平、2等「山鳥」（油絵）国枝金蔵、「海辺」（水彩）岡島一雄、（デッサン）松原一風、（鉛筆画）井垣嘉平）。日出 2・14</p> <p>3・6 陶磁器組合主催の奨励会・奨陶会、陶磁器試験場に開催（審査長中沢岩太、審査員武田五一、鶴巻鶴一ほか13人、1等松崎竹次郎、2等河村米次郎、中田徳三郎、上野儀三郎ら）。 京都美術 20</p> <p>3・12 名古屋美術展覧会出品絵画鑑別会、京都倶楽部で開催（審査員今尾景年、菊池芳文、竹内栖鳳、山元春挙、都路華香、内海吉堂、田近竹邨の7名）。日出 3・10</p> <p>3・15 丙午画会、裏寺町妙心寺に開催（「柳の下の堂」小川千麿、「夕ばえ」芝千秋、「愛宕」千種掃雲、「秋の日」秦テルヲら出品）。日出 3・16</p> <p>3・17 蒔絵家、富田幸七没（安政元 2・2、京都生れ）。 日出 3・19、美 9</p> <p>3・21 富田溪仙著「台清漫画紀行」発行。 日出 3・21</p> <p>3・22 前京都帝国大学教授松本亦太郎、市立絵画専門学校兼美術工芸学校校長となる。 市立美工沿革略</p>	<p>3・26 市立美術工芸学校創立30周年記念式を同校で挙行、同時に記念展を開催（生徒、職員、旧職員の作品を出陳）。 日出 3・26、3・28</p> <p>4・1～5・30 第15回新古美術品展、⁽¹⁾ 岡崎に開催。 京都美術 18</p> <p>4・3 大原寂光院の竣工式（書院の襖絵「浜辺の図」原在泉、「枯木遊猿」のほか三宅呉眺、都路華香、谷口香嶺、山元春挙）。 日出 3・31、京都美術 18</p> <p>4・一 川村曼舟、市立美術工芸学校教諭となる。 日本美術年鑑 昭18</p> <p>4・一 河合新蔵、東京から京都に移住、洛西椿寺前に下宿（6月関西美術院教授を嘱託される）。 関西美術院歴史概要、日出 4・23</p> <p>5・5 機織家2代川島甚兵衛没（享年58）。 恩輝軒主人小伝、京都美術 20</p> <p>5・14～18 京都印刷業同志会および彫刻業組合、連合して印刷および彫刻物展を府立図書館に開催（東京印刷会社、合資商報会社ら各種印刷技術、版画、絵葉書を、京都の梅原宗作「絹布印刷」、石田旭山「写真石版」、京都高等工芸学校「欧米各国の広告ビラ」をそれぞれ出品、また聖武天皇御勅願の百万塔など各種古代版画も陳列、出品総数約200点に及ぶ）。 日出 5・16</p> <p>5・15 丙午画会、裏寺町妙心寺に開催（徳永鶴泉「日」、千種掃雲「浪華の春」、芝千秋「夕暮」、秦テルヲ「白い煙」など出品）。 日出 5・16</p> <p>5・26 菊池契月、市立絵画専門学校教授心得となる。 京都に於ける日本画史</p> <p>5・一 富田誠、市立美術工芸学校描金科教員を嘱託される。 府庁文書 明44-79</p> <p>5・一 宮永東山、錦光山工場を退き、製陶業をはじめめる。 宮永東山自筆履歴書</p> <p>6・20 工芸界功労者、明石博高没（享年72）。 日出 6・22</p> <p>6・25 京都美術協会、創立20周年記念式を南禅寺金地院に挙行（翌26日、過去10年間の会員死亡者約140人の追善法要を南禅寺金地院に挙行）。 日出 6・26、27</p> <p>6・一 沢部清五郎、牧野克次に伴なわれて渡米（ニューヨークの高峰博士装飾に従事、1両年後、仏国へ渡ってパリに滞在）。 関西美術院歴史概要</p> <p>7・3～4 京都後素協会第3回小品画展、京都倶楽部に開催（原在泉、望月玉泉、今尾景年、三宅呉眺、川北霞峰、山元春挙、西山翠嶂、西村五雲、井口華秋ら出品）。 日出 7・3、4、京都美術 20</p>	

参	考	目	本
(1)第15回新古美術品展覧会 受賞者	<p>1等賞、「住良織広帯」中村半兵衛、「蒔絵手箱」西村彦兵衛。</p> <p>2等賞、「人形遣い」上村松園、「春山の霞丈夫」土田麦麿、「彫刻白熊」宮永剛太郎、「高波織広帯」龍村平蔵、「錦唐織広帯」市田文次郎、「大和錦広帯」篠屋機業店、「青柳織広帯」金田忠兵衛、「縮緬友俣染」野口安兵衛、「刺繡屏風」田中利七、「陶磁器花瓶」平岡万珠堂、「同花瓶」三浦竹泉、「金属鳥金花瓶」黒田帰一、「同香炉」山本直次郎、「漆器硯箱」稲垣和三郎、「蒔絵手箱」木村秀雄、「各種工芸竜花生」森田新太郎。</p> <p>3等賞、「万壑烟霧」木島桜谷、「市街の夕村落の晨」川北霞峰、「桜川」長瀬翠塘、「喧和」山田耕雲、「日永」榊原紫峰、「鳥屋のかど」由井漱泉、「停車場の夕」松宮芳年、「法身の光」西桜州、「日蓮」田畑秋濤、「暮るる冬」小野竹喬、「松林山水」池田桂仙、「装飾画」西村灌圃、「同」福田康、「同」太田紫川、「住良織広帯」北岡玄之助、「糸錦広帯」瀬川藤兵衛、「同」熊谷呉服店、「若京織」三宅清次郎、「縮緬友俣染」宮井傳兵衛、「同」安藤合名会社、「同」内藤合名会社、「羽二重裾模様」太田平助、「友俣染額」西崎安三郎、「縮緬友俣染」梅原長兵衛、「羽二重友俣」池垣文次郎、「縮緬友俣染」井上七右衛門、「塩瀬友俣染」井上清三郎、「刺繡半衿」荒川益次郎、「陶磁器花生」諏訪蘇山、「同額面」河村靖山、「松画花瓶」吉岡富之助、「金属銅花瓶」梅田篤光、「同茶杓」塩津親次、「同香炉」塚本専之助、「蒔絵享子箆笥」岡村与三吉、「同水仙画簪」川島由之助、「京人形」大木平蔵、「屏風」伏原利造、「京人形」清水勝蔵、「堆朱香合」山脇長太郎、「籠花生」山田彌三郎。 京都美術 20</p>	<p>1・21 藤島武二、仏伊留学より帰国、5・13東京美術学校教授に就任。</p> <p>2・9 七宝家、澁川惣助没（弘化1生、享年67）。</p> <p>2・一 有島生馬、帰朝、5月雑誌『白樺』に「画家ポール・セザンヌ」を發表、この作家をはじめてくわしく紹介した。</p> <p>4・21 彫刻家 萩原守衛没（明12生、享年32）。</p> <p>4・一 南薫造、6月には山下新太郎が帰朝。</p> <p>5・10～6・20 白馬会第13回展、藤島、湯浅一郎、南薫造らの滞欧作を特別陳列、青山熊治「アイヌ」により白馬賞を受賞、同会最後の展覧会、明44・3・8解散を決議。</p> <p>5・14～10・29 日英博覧会、ロンドンに開催、古美術品、現代美術品のほか、東大寺、鳳凰堂、東照宮陽明門の模型を出品（京都より川島甚兵衛「百菊之図屏風」（両面綴錦）を出品）。</p> <p>6・9 洋画家 渡辺与平、東京で没（明22・10・17長崎生、旧姓宮崎、号ヨヘイ）。</p> <p>7・3～20 白樺社主催の有島生馬、南薫造滞欧作品展、上野竹之台に開く。</p> <p>7・28 平山成信ほか46名美術審査委員に任命される。</p> <p>9・17～29 斎藤与里作画展、神田淡路町琅玕湖に開催。</p> <p>10・14～11・23 第4回文展、契月「供灯」（近美）、観山「魔障図」、春草「黒き拙」、山下新太郎「読書」、萩原「女」、朝倉「墓守」など、受賞者は2等、菊池契月ほか3名、3等、鏡木清方ほか21名、褒状、上田万秋ほか43名。11・28～12・5京都でも開く、以後毎年開催。</p> <p>10・18 黒田清輝、帝室技芸員になる。</p> <p>10・19～11・15 狩野芳崖遺作展、東京美術学校に開催。</p> <p>11・一 『白樺』、ロダン特集号を刊行。</p>	<p>この年 ▷ 『スバル』に高村光太郎、「緑の太陽」を書く。</p>
(2)第9回関西美術会展の主な作品	<p>油絵、「紀州勝浦図」「青海原図」鹿子木孟郎、「晩婦の図」「八瀬の秋図」都鳥英喜、「楽八夢の図」「花の図」伊藤快彦、「楠の図」南繁則、彫刻、「新児の置物」宮野恒男、その他寺松国太郎、間部時雄、田中善之助、加藤源之助、新井謙也、黒田重太郎、河合新蔵、参考品陳列：京都高等工芸学校の寄木細工額風景、各種花瓶、鶴巻鶴一の「帯地ジャワ革布」「文箱」故浅井忠図案、杉林古香作、京都陶磁器試験所陶器花瓶類、なお津田青楓の油絵、額ぶちなども陳列。</p>	<p>日出 10・11、10・17</p>	

京	都	府
7・14	神阪雪住、富田誠ら競美会を設立、本日宇治浮舟園に協議会を開催（設立趣旨：近來絵画はようやく発達の一途に向っているが、美術工芸はなお不振状態にあるゆえ、図案、蒔絵、漆器、金属、指物など一層の研究を行なわんがため春秋に陳列会を開催、批評会、雑誌の発行などを計画。設立会員は上記の他、木村秀雄、杉村古香、齊藤弁之助、古市卯之助、河村蜻山、岩村貞藏、迎田秋悦、山本利兵衛、戸島光宇）。 京都美術 20	金地院に挙行（黙語会の事業完成報告をかね、同会員互に浅井忠の遺墨を持ち寄り展覧、稿本・木版画など）。 日出 11・3
7・1	今尾景年、建仁寺禅居庵天井画「臥龍の図」完成。 日出 7・26	11・15 岡田播陽堂主催、百画傑作展、寺町四条下ル大雲院に開催。 日出 11・8
8・1	初代諏訪蘇山、伊羅保釉高麗狗一對を五条坂若宮八幡宮に奉納。 京都工芸大観	11・1 明石染人、京都高等工芸学校助教教授に任命される（繊維品加工学〔精練、染色、捺染、整理〕および染織工芸史を教授）。 日本美術年鑑 昭35
8・1	大谷ミッション第2回探検隊員橋瑞超ロシアを経て新疆省に入るべくロンドンを発つ。 書道全集 25	12・14 機業家 西村治兵衛没（千切屋・千総の主人、享年50、寺町二条下ル妙満寺に葬る）。 京都名家墳墓録、京都美術 21
9・24~25	丙午画会、裏寺妙心寺に開催（千種掃雲「魚市場図」、小川千鶴「京名所図」、秦テルヲ「カンカン虫」「夏の昼」、徳永鶴泉「雪の山図」、芝千秋「春浅し」「夕月」など出品）。 日出 9・24、26	12・21 日本画と洋画の青年画家および批評家ら談話会の形で黒猫会（ル・シャ・ノワール）の結成を先斗町某楼の離座敷で行なう（出席者11名、土田麦穂、小野竹橋、樫野南陽、秦テルヲ、福本古葉、杉浦香浦、田中善之助、黒田重太郎、新井謹也、津田青楓、田中喜作）。 日出 12・23
9・1	津田青楓帰国。 関西美術院歴史概要	12・1 関西美術院、裸体モデルを雇ってデッサンを開始。 日出 12・9
9・1	市立絵画専門学校および市立美術工芸学校の職員16人、東宮殿下行啓の際、画帖を贈呈することとなる（生徒は絵葉書を贈呈、意匠などは神阪雪住の担当）。 日出 9・23	12・23 図案家 古谷紅麟没。 京都美術 21
9・1	竹内栖鳳、東本願寺山門天井絵「天女舞楽の図」下絵提出、助手として西山翠嶂、土田麦穂を伴い法隆寺をたずねる。 日出 9・14、9・28	この年 ▷春、黒田重太郎は旧友渡辺与平の勧めにより東上し、太平洋画会に学ぶ、数カ月。 京都洋画の黎明期
10・1	東宮殿下、市立絵画専門学校および市立美術工芸学校に行啓（生徒の作品展覧、竹内栖鳳「狗児図」「牡鶏図」、菊池芳文「柿実図」「鴉図」、山元春挙「馬図」「猿図」を揮毫）。 日出 8・19	▷ 関西美術院、福井利吉郎に美術史臨時講座を囑託。 関西美術院歴史概要
10・10~11・9	第9回関西美術会展、 ⁽²⁾ 岡崎町博覧会場に開催。 日出 10・8、10・17	▷ 鹿子木孟郎、新井謹也と黒田重太郎を助手として『中等教育自在画教科書』を編さん。（東京金港堂より明44・3 出版）。 日出 10・4、明44・3・9
10・14~11・23	第4回文展 ⁽³⁾ （菊池契月「供灯」など、この年から京都でも開催され、11・28~12・5 京都博覧会館に京都陳列会を開催）。 日本芸術院史	▷ 富田溪仙、河東碧梧桐、塩谷鶴平と親交し、それ以来俳誌『土』の表紙を毎号描く。 富田溪仙遺作展覧会目録
10・22~23	競美会、佳都美会第1回展を南禅寺金地院に開催。 京都美術 21	▷ 京都美術協会、美術館建設の議を知事・市長に建議。 京都美術 19
10・26	深田康算、欧州留学から帰国、京大教授として美学美術史講座を担当。 京都大学70年史、美術新報 147	▷ 住友吉左衛門、京都開催の文展出品のうち、青山熊治「九十九里」（1,000円）、山下新太郎「読書の後」（500円）、三宅呉眺「園の花」屏風（450円）を購入。 美術新報 196
10・1	竹内栖鳳、東本願寺山門の天井画揮毫はじめる。 絵画叢誌 282	▷ 滞仏中の安井曾太郎、リュドジュール・シュミディのアパートに抛り、夏再度ビル・ロングの村に遊ぶ。その後アカデミー・ジュリアンのジャン=ポール=ローランス教室を去り、自由研究に入って、リュドヴォー・ジラルにアトリエを持つ。作品「林檎」・「パンと肉」・「葦屋の庭」など。 日本美術年鑑 昭31
11・2	黙語会主催、故浅井忠追悼会を南禅寺	▷ 大丸北峰、支那から帰国、陶器業を開業。 京都工芸大観

参	考	日	本
(3)第4回文展（京都関係のみ）	審査員 菊池芳文、谷口香嶠、山元春挙、竹内栖鳳、今尾景年、鹿子木孟郎、中沢岩太 審査員出品 「四季花卉」谷口香嶠、「月下水禽」今尾景年、「寂寥」山元春挙、「孔雀」菊池芳文、「紀州勝浦」鹿子木孟郎 受賞者 日本画、2等賞、「供灯」菊池契月、3等賞、「かりくら」木島桜谷、「上苑賞秋」上村松園、「大仏炎上」平井操仙、「夕月」川村曼舟、褒状、「逢坂山の暎」上田万秋、「暮雪」庄田鶴友、「秋山眺靄」田近竹邨、「園の花」三宅呉眺、「入江の夕」徳田隣斎、「寂雨」服部春陽、「松林高士」池田桂仙、「ながき日」榊原紫峰、「あひるのかど」有井祥雲 西洋画、3等賞、「ネルのきもの」渡辺与平、「かげのひと」寺松国太郎 日本芸術院史 入選 第1部日本画 「僉議の庭」小林雨邨、「椿」小林霞村、「あひるのかど」有井祥雲、「寒山余光」高山春凌、「那覇の橋畔」松村梅叟、「春雨の船着場」水越松南、「溪風」山下馬山、「満潮」上田麗水、「御やすらい」古谷一鬼、「白雨」長谷川楽山、「六甲山」松宮芳年、「出帆前」青山翠光、「夏の谷間」中居曠谷、「通り雨」柴原魏象、「秋雨」加藤英舟、「青き柿と白き家鴨」星野空外、「夏の深山の夕暮」古谷苔泉、「雨後」江口鷗洲、「たびの朝」長瀬翠塘 第2部西洋画 「肖像」寺松国太郎、「八瀬村」「田の上山」都鳥英喜、「京の暮」間部時雄 第3部彫刻 なし。 絵画叢誌 283		
▷	高島屋、日英博覧会へ壁掛「世界三景」を出品（下絵は「ベニス」の月）竹内栖鳳、「ロッキ一山の雪」山元春挙、「吉野の桜」都路華香が描く）。 京都の明治文化財		

京	都	府
<p>1・7 黒猫会(ル・シャ・ノアール)、伏見島末楼に開催(出席者:土田麦麿・小野竹橋・黒田重太郎・津田青楓・田中喜作・田中善之助・新井謹也、その他臨時に足立源一郎も出席、2・11、3・10にも開催)。 日出 1・10、2・13、3・12</p> <p>1・9 市立絵画専門学校校舎新築落成式を挙行。 美 2:7</p> <p>1・22~24 欧州各国の各種工芸品展、京都商品陳列所で開催(本市製産品の参考品として)。 日出 1・22</p> <p>1・29~30 後素協会小品画展覧会、京都倶楽部に開催。 京都美術 21、日出 1・30</p> <p>1・一 京阪の洋画家、第1回懇親会を山城淀町伊勢市楼に開催、八幡祭りを記念して同会を双鳩会と名づける(出席者〔京都側〕鹿子木孟郎、都鳥英喜、河合新蔵、寺松国太郎、〔大阪側〕山内愚仙、松原三五郎、赤松麟作、小笠原豊涯ら。大末ころまで)。 日出 1・18、大 12・11・8</p> <p>2・3 美学会、京都文科大学第9教室に開催(福井利吉郎「ギリシャ建築のプロポーション」、深田康算「感情移入美学に就いて」の講演)。 美術新報 198</p> <p>2・11 桃華会第2回展、寺町大雲院に開催(「あめはれ」・「山の池」・「乙密台の夕」・「こさめ」・平井樸仙、「旗艦」・「北斗の星」・「吉田町」・「五条坂にて」松宮芳年、「花月」西堀刀水、「よあけ」岡本蕉雨、「梅」合田一峰、「市に暮れたる百姓馬」柴原魏象、「里近き山」榊原佳山、「富士の絶頂」・「鴨川の雪」佐野有年、「三軒の村」・「舞妓」花井抱甕など出品)。 日出 2・12、京都美術 21</p> <p>2・12 関西美術院第4回院内競技会開催(11日審査済みの研究生の作品を一般に展覧、油絵・水彩・デッサン・漫画など数十点と別に鹿子木孟郎の美人画も陳列(油絵)。1等「伐木の山」国枝金蔵、「肖像」井垣嘉平、2等「西浜」前川千帆、「冬の日」池田治三郎、(水彩)2等「梅ヶ畑にて」新井謹也、「町の女」吉田真里など)。日出 2・13</p> <p>2・20 洋画家廿日会、新樺木町都鳥英喜宅に開催(出席者:湯浅半月・河合新蔵・伊藤快彦・井口草迷宮・寺松国太郎・鹿子木孟郎・大沢巴城・黒田天外ら。各種展覧会の批評、『景年花鳥画譜』の感想、画は夢二・歌は晶子の全盛について各人の意見を披露)。 日出 2・22</p> <p>2・一 府衛生課、五条坂ならびに清水坂の陶磁器店から鉛分を含む有毒楽焼各種を押収。 日出 2・10</p> <p>3・6 市立絵画専門学校助教諭猪飼嘯谷、市立美術工芸学校教諭兼任となる。 府庁文書 明44-48</p> <p>3・15 金工 9代中川浄益没(名益之助、享年63)。 日本の鍍金</p>	<p>3・25 市立絵画専門学校卒業式(入江波光、松宮芳年、榊原紫峰、村上華岳、星野空外、榊原佳山、別科土田麦麿、小野竹橋、野長瀬晩花、青山翠光ら、3・27~29、絵専美工校友会展開催、金賞「髪」土田麦麿ら、銀賞「祭」小野竹喬ら)。 京都美術 21、美 2:9</p> <p>3・27 市立染織学校、烏丸通上立売上ルに新校舎完成し移転。 日出 3・28、実業教育50年史</p> <p>3・一 袋師 7代土田友湖没(享年76、名半四郎、号唼雪)。 談交テキスト茶道具編</p> <p>4・8~9 ミズキ会水彩画展、寺町仏光寺空也寺に開催(同会は吉田真里・二神徹外・黒野光之助ら発起により設立されたもの)。日出 4・9</p> <p>4・9 競美・佳都美両会合併第2回小作品展、知恩院桜馬場源光院に開催(佳都美会は装飾的絵画を展覧、「新高雄」山鹿清華、「団扇五種」田村春暁、「焼絵額」神阪松濤など。競美会は美術工芸品を展覧、「桐の見台」神阪雪佳考案・一瀬小兵衛作、「銘酒呑」清水六兵衛・古市卯之助合作など)。 日出 4・10</p> <p>4・15~17 京都大和絵協会主催、第1回展、府立図書館に開催(浮世絵を展覧)。 同展図録</p> <p>4・15~5・25 第16回新古美術品展、⁽²⁾岡崎公園勸業館に開催。 美 2:11</p> <p>4・18 富田誠、市立美術工芸学校教諭心得(描金科)となる。 府庁文書 明44-48</p> <p>4・一 興正寺御影堂完成(明40・5・5着工、稲垣啓二(京都堂宮師)設計、各様折衷)。 京都の明治文化財</p> <p>4・一 袋師 8代土田友湖没(享年50、号唼雪)。 談交テキスト茶道具編</p> <p>4・一 京都市立陶磁器試験場付属伝習所を設置、陶画、ロクロの2科を設ける。(当業者の子弟をはじめとする一般青年層に陶器製造の技術を教え次代の陶業家を養成するため)。藤江永孝伝</p> <p>5・2 黒猫会例会、田中喜作宅に開催(展覧会開催における出品鑑査について協議、会員内で意見対立。その結果翌3日、突然解散することに決定)。 日出 5・4</p> <p>5・13~15 旧黒猫会の5人は会合して新しく仮面会(ル・マスク)を結成。第1回展を京都青年会館に開催(同会は社交よりも各員各自の芸術的意識の尊重による作品発表を目的とする。「南国」・「朝」・「祭」小野竹橋、「女」・「海」・「髪」・「五月の作」・「朧夜」土田麦麿、「暮れゆく農人橋」・「くれ」・「よこ顔」黒田重太郎、「少女」・「窓」・「ある日」新井謹也、「習作」梅原良三郎など出品作21点)。 日出 5・9、11・14</p> <p>5・一 イタリア万国博(平井樸仙「大仏炎上」菊池契月「供灯」など受賞)。 日本絵画史</p>	

参	考	日	本
(1)第5回文展(京都関係のみ)	審査員 菊池芳文、山元春挙、竹内栖鳳、今尾景年、谷口香嶠、鹿子木孟郎、中沢岩太 審査員出品 「羅浮」谷口香嶠、「雨」竹内栖鳳、「子雀」菊池芳文、「舞子の浜」鹿子木孟郎 受賞者 日本画 2等賞「若葉の山」木島桜谷、3等賞「松の月」都路華香、「花ぐもり」榊原紫峰、褒状「まきばの夕」西村五雲、「二月の頃」村上華岳、「髪」土田麦麿、「休み」大村広陽、「漁歌」山下竹齋、「山雲吞吐」田近竹郁、「あかつち山」平井樸仙、「万竿烟雨」山田介堂、「厩」広田百豊、「耶馬溪の朝」庄田鶴友、「噴火坑」川北霞峰、「高野山の夏」川村曼舟、「片岡山のほとり」橋本関雪、「蛇皮線」松村梅叟、「夾竹桃」広江霞舟、「上加茂」高瀬春暁 入選第1部日本画 「港」小野竹喬、「溪山春暁」「疎林秋晚図」池田桂仙、「上加茂」高瀬春暁、「露の朝」中島春鷗、「杉垣」岡文濤、「春秋山水」中井曠谷、「春日野」高橋秋華、「蜻蛉」疋田芳沼、「夾竹桃」広江霞舟、「夏の加茂川」松宮芳年、「揚弓遊び」三宅皆山、「灯」川本参江、「里」江口鸚洲、「耶馬溪の朝」庄田鶴友、「休み」大村広陽、「蓮花」榊原苔山、「厩」広田百豊、「近江国の柞」猪飼嘯谷、「かんどり」山鹿清華 日本芸術院史	1・初~14 ハンガリー ブダペスト府美術館において日英博京都出品の残部を陳列、好評。 1・24 日本画家 野村文挙没(安政1生、享年58)。 3・8 白馬会、時勢の推移に鑑み解散の決議をなし近日解散式を挙ぐる由。 3・24 洋画家 青木繁没(明15生、享年30)。 3・27 ローマ万国美術博覧会開催、特別館を建て新古の日本画94、洋画31、彫刻13を出品。 4・23 独人美術史家グラーゼル来日、この日第6回美術家大懇親会に列席。 5・10 日本美術史家 平子鐸嶺没(明10生、享年35、『仏教芸術の研究』ほか)。 5・一 万鉄五郎・平井為成らアブサント小品展。 8・17 平山成信ほか47名、美術審査委員会委員となる。 9・16 日本画家 菱田春草没(明4生、享年38)。 10・3~10 津田青楓作画展、東京神田淡路町琅玕洞に開催。 10・10 水彩画家 大下藤次郎没(明3生、享年42)。 10・11~21 白樺社主催泰西版画展、赤坂三會堂に開催、セザンヌ、ムンクなど展覧。 10・14~11・19 第5回文展(谷口香嶠「羅浮」、大観「山路」、藤島「ヴィラニデステの池」小杉未醒「水郷」。受賞者 2等賞 木島桜谷ほか4名、3等賞 山内多門ほか13名、褒状 小坂芝田ほか46名)。 11・1~12 白樺社主催、洋画展覧会を赤坂南坂下三會堂に開催、その中に齋藤与里、浜田葆光、中村彝、山下新太郎、富本憲吉、津田青楓、白瀧幾之助などの出品がある。 11・一 満谷国四郎、渡欧。 12・一 東京美術学校、日本画出身者により東台画会が創立される。	この年 ▷『白樺』、さかんに後期印象派の画家を紹介する。 ▷『新小説』掲載の三宅克己の「過渡期の芸術家」は革新運動が文展画家の間にひきおこした脅威と反感を示す。 ▷『日本美術年鑑』第1巻、画報社より出版。
(2)第16回新古美術展覧会	受賞者 1等賞 なし 2等賞 稲垣和二郎、篠屋機業店、平野吉兵衛、木村秀雄、山田九蔵、西村彦兵衛、十合呉服店、石本暁海、三浦竹泉、市田文次郎、野口安左衛門 3等賞 森月城「塩浜」、不動立山「朝顔」「吹き菊」、広江霞舟、村上華岳、松宮芳年、平井樸仙、野長瀬晩花、太田紫川、宮野恒雄、北岡玄之助、井上清三郎、安藤合名会社、内藤合名会社、岡本仙助、西崎安三郎、沢渡源兵衛、荒川益次郎、岡村与三吉、田中弥兵衛、三木表悦、高木治郎兵衛、雨宮宗七、黒田婦一、駒井音次郎、溝口安之助、中村竹次郎、平岡万珠堂、青木青雲、森田新太郎、宮崎半七、大木平蔵、清水勝蔵 4等賞 森吐月「若き母」、外34名 5等賞 星野空外、外44名 美 2:11		

京	都	府
<p>6・10～12 市立絵画専門学校、同美術工芸学校創立記念展を同校に開催（古書画等の参考品の他、木島桜谷「時雨」、尾竹国観「油断」、寺崎広業「溪四題」、山元春拳「塩原の奥」等も展覧）。 京都美術 22、美7月号</p>		
<p>6・18 関西美術院、院内競技会を開催（油絵、水彩画、漫画、デッサン）。 日出 6・19</p>		
<p>7・2～3 後素協会小品画展、京都倶楽部に開催（今尾景年、望月玉泉、三宅呉眺、服部春陽、川村曼舟、川北霞峰など出品）。 京都美術 22</p>		
<p>7・3 鶴巻鶴一、新藤頼のテーブルクロスと数本の帯を京都高等工芸学校第7回卒業式陳列展ではじめて発表。 宮崎友禪齋と近世の模様染</p>		
<p>7・15 支那絵画展、市立美工で開催。 京都美術 22、美8月号</p>		
<p>7・15 京都陶磁器組合、陶磁器奨励会を市立陶磁器試験場内で開催（菓子鉢・松・鴨脚の画題を与える。出品159人、出品総数186点、審査長中沢岩太、審査員武田五一、鶴巻鶴一ら13人、審査幹事藤江永孝、錦光山宗兵衛）。 日出 7・16</p>		
<p>7・18 津田青楓、東京へ出発（小石川区高田老松町40に居住）。 日出 7・22</p>		
<p>7・19～25 古代染織刺繍展、岡崎京都商品陳列所に開催。 京都美術 22</p>		
<p>7・一 田村宗立、建仁寺僧堂の襖に「竜の図」を揮毫(明45・9 同寺の方丈の襖絵30余間を製作)。 日出 明45・9・19</p>		
<p>8・一 竹工 11代黒田正玄没(享年43)。 淡交テキスト茶道具編</p>		
<p>9・一 中井宗太郎、小笠原秀実および京大文科出身文学専攻の研究者ら共同で文学美術研究会を結成(文芸上における諸問題を研究する目的。 第1回は人生と芸術について論議、つづいて現今の文学美術評論の余りに浅簿軽佻なるにあきたらず文学美術上の新浪漫主義を根本的に研究する。 研究問題:「造形美術に於ける内容否定論の謬妄」植田寿藏、「詩人デーメルの芸術的態度」小笠原秀実、「近代思想と新浪漫主義、特にバンゴークの研究」中井宗太郎、以後毎月会場もちよりで開催、深田康算も参加。10・5 例会を小笠原秀実宅に開催、各自発表)。 日出 8・26、30、10・9、12・9</p>		
<p>10・1～2 競美・佳都美両会、第3回展を南禅寺金地院に開催。 日出 10・2～4</p>		
<p>10・5 雑誌『日本美術と工芸』第1号発刊(黒田天外主幹)。 日出 10・12</p>		
<p>10・10～11・9 関西美術会、第10回記念洋画展を岡崎公園博覧会館に開催(出品総数は油絵・水彩画など340点、東京30点、大阪40点。他は京</p>		

都、「グレーの秋」・「グレーの柳」・「グレーの橋」故浅井忠、「山僧怪力」田村宗立、「白衣婦人」鹿子木孟郎、「虫干」伊藤快彦、「無量の感」都鳥英喜、「野菊」黒田清輝。その他小山正太郎・久米桂一郎らの作品も陳列。同会出品作50点が宮内省買上げとなる)。日出 11・9、11、美術新報 明44・11

10・14～11・19 第5回文展⁶⁾(京都青年作家の活躍が注目され、榊原紫峰「花ぐもり」、村上華岳「2月の頃」、土田麦僊「髪」などが出品される)。
日本芸術院史

11・12 友禅協会、創立20周年記念式を平安神宮大極殿に挙行(この日から18日まで300年以來の古代友仙を蒐集陳列)。日出 11・13、近代友禅史

11・一 島文次郎・湯浅吉郎・飯田政之助ら洋画趣味普及を目的としてスケッチ同好会を設立。
日出 11・5

12・1～5 大和絵協会、第2回浮世絵展、府立図書館に開催。
京都美術 23

12・3 京大文科美学会第3回総会、京大法科講堂に開催(来会者500余人と盛況、「文部省美術展覧会に於ける日本画について」浜田耕作、「絵画とその内容」深田康算、「文展に於ける東西の日本画」松本亦太郎の講演がある)。
日出 12・4、5

12・21 漆工 9代中村宗哲没(享年56、号喜三郎、義生、英齋)。
淡交テキスト茶道具編

この年

▷夏 安井曾太郎、ブルターニュに赴き、秋再びズビルロング村に遊ぶ、作品「垣」「村の道」「曇り日」「春の家」等。
日本美術年鑑 昭31

▷ 関西美術院、医科大学学生保々輝雄に解剖学の、藤茂木に透視画法の各臨時講座を囑託。
関西美術院歴史概要

▷ 関西美術院競技会開催(審査員、鹿子木孟郎、都鳥英喜、松原三五郎、〔油絵〕2等賞「人物」池田治三郎、3等賞「加茂の森」南繁則、褒状「静物」三井文二、「風景」堀規矩太郎、〔水彩〕3等賞「午後の人」国枝金蔵、褒状「荒神祭」吉田真里。田中善之助、黒田重太郎は出品せず)。
日出 5・6

▷ 神阪雪佳、弟松濤とともに丹波亀岡矢田虎之助方の襖に泥画で天平風の「狩の図」を描く。
日出 6・20

▷ 新古美術工芸品製造販売元、池田合名会社解散(不況のため。明28設立、社長池田清助所茂の書画屏風道具は、京都倶楽部で入札される)。
美術新報 201、日出 5・24

▷ 京都御所楽良殿額を岡本所保揮毫。
書道全集 25

参	考	日	本
<p>▷ 岡崎の美術館を第1勸業館と改称。 京都博覧協会史略</p>			
<p>▷ 東本願寺大門完成(明40着工、市田重郎兵衛(棟染)、市田辰藏設計、各様折衷)。 京都の明治文化財</p>			
<p>▷ 東本願寺勅使門完成(明43着工、亀岡未吉(技師)、鈴木幸右衛門(棟染)設計、各様折衷)。 同上</p>			
<p>▷ 3代川島甚兵衛、「文具曝涼之図壁掛」を完成(宮内省の英国皇室への贈物となる)。 恩輝軒主人小伝、西陣史</p>			
<p>▷ 金島桂華、竹内栖鳳の門に入る。 金島桂華</p>			

京	都	府
<p>1・14 美術肖像協会、京都倶楽部に新年宴会を開く(秀崎秀峰、吉田柳外、矢野翠雲、和田東岳、国井翠玉、久保洪泉ら10余名出席)。 日出 1・15</p> <p>1・27 高島屋、意匠会を開催(神阪雪佳、西村五雲、井口華秋、上田万秋ら、同店意匠部の人々、内外近刊の美術雑誌その他について意匠を研究)。 日出 1・28</p> <p>1・29～30 後素協会春季小品展覧会、京都倶楽部に開催(今尾景年「鳩」、三宅呉暁「東方朔」、木島桜谷「収穫」、服部春陽「美人」、猪飼嘯谷「競馬」、川北霞峰「雪景山水」、菊池契月「美人」、原在泉「桜」、奥谷秋石「山水」、上村松園「支那美人」、望月玉溪「花鳥」、井口華秋「女」など)。 日出 1・30、京都美術 24</p> <p>1・30 テルヲ画会、裏寺町妙心寺に開催(出品、「酒の女」「ラテンの女郎」「歓楽のあと」「寝顔」「兇漢」など野獣派の作品30点)。 日出 1・20</p> <p>2・1～15 全国画家新作品展覧会、京都美術新報社主催で嵯峨嵐山倶楽部に開催(富岡鉄斎「溪居適居」、竹内栖鳳「猿橋」、今尾景年「雨中桜雀」、都路華香「新抑群鴉」、木島桜谷「疎柳浅水」、井口華秋「破荷双鴨」、西村五雲「双猿」、谷口香嶠「仲国」、上村松園「佳人聴答」、鈴木松年「梅花図」、菊池芳文「柳に鶴鶴図」、菊池契月「美人図」)。 日出 2・11、22</p> <p>2・2 栖鳳塾研究会初会開催(本年の竹杖会幹事は小野竹橋、研究会幹事は広田百豊、批評員に西山翠嶂、西村五雲、井口華秋、徳田隣斎、八田高容、土田麦麿、森月城、加藤英舟、小野竹喬、千種掃雲、柴原魏象、中居曠谷、広田百豊、橋本虹影、東原方仙、橋本古葉を決定、1等「山水画」土田麦仙、2等「初春」柴原魏象、「鷄」奥村保一)。 日出 2・22</p> <p>2・2 全国図案大展覧会、京都倶楽部に開催(主催は黒田天外らの経営する日本美術工芸新報社、京都図案会および関西図案会より出品)。 日出 2・3</p> <p>2・11 関西美術院、院内競技会開催。 日出 2・12</p> <p>2・11 早苗会展覧会、三条柳馬場角青年会館に開催(川村曼舟「雷電」、服部春陽「暖風」「ほととぎす」、庄田鶴友「朧月」、玉舎春輝「日本アルプス」、小村大雲「天曇る北行」、長谷川翠山「白鷺」、岡文塘「鷄」「鴛鴦」、長谷川樂山「火」、岡田英一「湖辺の冬」、小森秀村「みち」、林文塘「花枇杷」など)。 日出 1・12、京都美術 24</p> <p>2・15 金子静枝4周年忌、高台寺円徳院に挙行(玉泉、在泉、栖鳳、春挙、雪佳、呉暁、桜谷、</p>	<p>金石、伊藤快彦、鹿子木不倒、松園、連山、一華、王溪などの画を展観)。京都美術 24、日出 2・16</p> <p>2・26～3・19 この間、瀧正一、講師として「日本絵画史」の定期講座を京都大学法科大学講堂に開催予定(火水木の日)。 日出 2・25</p> <p>3・9～10 全国絵画展覧会、日本美術工芸社主催、京都美術倶楽部に開催(竹内栖鳳「春山残雪」、富岡鉄斎「梅花高土」、今尾景年「蕨取」、菊池芳文「松下双鷄」、木島桜谷「雨中山水」、契月「美人」、都路華香「柳陰高土」、望月玉泉「寿老人」、鈴木松年「紅梅双鷄」、原在泉「子の日遊」、巨勢小石「観音」など)。 日出 3・10</p> <p>4・1～5 第17回新古美術品展、⁽¹⁾ 岡崎に開催(絵画140点、図案56点など)。 京都美術 25</p> <p>4・2～3 丙午画会展、裏寺町妙心寺に開催。 日出 4・3</p> <p>4・5～6 桜花会第3回展、寺町四条下ル大雲院に開催(榊原佳山、西堀刀水、星野空外、榊原紫峰、平井樺山、入江波光、山田臥雲、松宮芳年、佐野有年、岡本藍雨、村上華岳など)。 日出 4・2、5、6、京都美術 24</p> <p>4・5～9 津田青楓作品展、府立図書館楼上に開催(津田青楓作品の他、賛助出品として藤島武二・山下新太郎・斎藤与里・柳敬助・湯浅一郎・南薫造・有島生馬・高村光太郎・富本憲吉らの油絵・水彩・パステル・彫刻・半折画・陶器・版画・七宝などを展観、非常に好評)。 美術新報 明45・5、京都美術 24</p> <p>4・12～21 白樺社主催、版画彫刻展、府立図書館楼上に開催〔ロダン彫刻3点(ロダンから白樺社に贈られた「ある小さき影」「ロダン夫人像」「パリゴロツキの首」の3小品)、ロートレック石版11葉、ピアズレー32葉、フオゲラー33葉及びゴッホ・マチスら後期印象派の作品写真など総数234点にも及ぶ〕。 日出 4・11、美術新報 明45・5、京都美術 24</p> <p>4・28 関西美術院第11回院内競技会、同院にて開催。 日出 4・29</p> <p>4・28 栖鳳塾研究会(加藤英舟、井口華秋、福本古葉の批評員、麦仙「芸妓と舞妓」、竹喬「田舎山水」出品)。 日出 5・2</p> <p>5・2～3 現代諸家画幅展覧会、京都倶楽部に開催(松浦松栄堂主催、栖鳳、鉄斎、竹邨、桜谷、華香など)。 日出 5・2、5・5</p> <p>5・5 第4回十二画会、京都倶楽部に開催(福村祥雲堂主催、1月晴衣(玉舎春輝)、2月猫の意(西村五雲)、3月夜桜(花井抱甕)、4月路の花(庄田鶴友)、5月新緑(川北霞峰)、6月漁り(渡辺公観)、7月宵山(猪飼嘯谷)、8月白雨(徳</p>	

参	考	日	本
(1)第17回新古美術品展覧会 受賞者 1等賞、「文台硯箱」稲垣和三郎、「モザイク模様孔雀花瓶」清水六兵衛 2等、「唐織帯地」山田九蔵、「同」西村治兵衛、「蔦蔦絵手箱」田中彌兵衛、「平卓」三木表悦、「象嵌桐彫手箱」沖岡榮造、「音のゆくえ」石本眺海、「絞綸子友禅」野口安左衛門、「縮緬友禅」岡本仙助、「絞縮緬友禅」北岡玄之助、「鍍鉄海老花瓶」河内宗光、「堆黒香合」逸見大吉 3等、「狐怪」猪飼嘯谷、「薫風」石崎光瑤、「桃の節句」松村梅叟、「忍ぶ恋」不動立山、「筆合戦」中村美術店、「唐織帯地」市田文次郎、「同」井上七石衛門、「糸錦帯地」喜多川平八、「唐織帯地」中村半兵衛、「同」篠屋機業店、「綴錦帛紗地」太田平助、「同」東耕蔵、「縮緬友禅」岡島卯三郎、「羽二重友禅」池垣文次郎、「塩瀬友禅帯地」井上清三郎、「同帛紗地」北村喜三郎、「半襟柳の図」荒川益次郎、「雲竜紋花瓶」三浦竹泉、「古代模様花瓶」奥村松山、「春慶文台硯」西村彦兵衛、「蒔絵硯筥」神阪祐吉。 京都美術 25	(2)第6回文展(京都関係のみ) 審査員 菊池芳文、山元春挙、竹内栖鳳、今尾景年、鹿子木孟郎 審査員出品 「嵐狹」山元春挙、「躍鯉図」今尾景年、「鴨東の妓」鹿子木孟郎 受賞者 日本画、第1科、褒状、「層巒積雪」秦金石、「深遠」田近竹邨、「竹溪細雨図」池田桂仙、「船過孟浪梯図」内海吉堂 第2科、2等賞、「寒月」木島桜谷3等賞、「茄子」菊池契月、「青田」西山翠嶂、「浦づたい」平井樺仙、「釣日和」小村大雲、褒状、「島の女」土田麦麿、「白い雨」広江霞舟、「豊兆」都路華香、「鶯」松村梅叟、「くさむら」山下馬山、「御室の躑躅」阿部春峰、「謡」原田西湖、「鶴船」富田溪仙、「水牛」大村広陽、「幽澗起雲図」庄田鶴友、「夏の雨」藤井雪田、「枇杷」榊原苔山、「かずみ網」加藤英舟、「ゆき空」佐野一星 西洋画、3等賞、「女四人」池田治三郎、無鑑査出品 「寒月」木島桜谷 入選 第1部日本画第1科 「白雲一帶」山田介堂、「寒霞溪美景」兼松蘆門 第1部日本画第2科 「暮林」山下竹峯、「今朝の秋」山口松斎、「小矢児」井村方外、「芭蕉」高橋秋華、「薫風」石崎	2・16～25 白樺主催第4回美術展、赤坂三會堂に開催(ロダン、ルノアールの作品展示、大2の第6回展にはムンク、ゴッホ、マチス、ロートレック、セザンヌの作品展示)。 3・一 旧白馬会の中沢弘光、山本森之助、三宅克己、杉浦非水、岡野栄、小林鍾吉、跡見泰の7名の発起で光風会を創立。 4・1～15 岸田劉生個展(琅玕洞：高村光太郎主宰)。 4・2～6 菱田春草追悼遺作展、東京美術学校に開催(遺作295点のほか大観「五柳先生」、観山「鶴の磯」、広業「夏秋山水」など出品)。 5・20～21 競美、佳都美両会、美術工芸品展を大阪南区下寺町堀初伝寺に開催。 5・29 新旧画派の対立が激化したため、文部省は美術展覧会規程を改め第1部(日本画)を第1科(旧派審査委員による)第2科(新派)に分ける。大3・8・11、科を廃す。 6・9～29 光風会第1回展、上野竹之台に開催。 6・20 岡田三郎助、藤島武二、本郷春木町に本郷洋画研究所を設立し開講。 6・一 青木繁遺作展。 7・15 狩野友信没(9世狩野浜町、大学予備門、文部省、東京美術学校に奉職)。 7・一 山本鼎渡仏。 10・8 南画家 村田香谷没(享年82)。 10・13～11・17 第6回文展(上野竹之台に開催2等賞、第1部第1科、小坂芝田「秋爽」、津端道彦「火牛」第2科、木島桜谷「寒月」、安田靉彦「夢殿」、今村紫紅「近江八景」第2部(西洋画)、小杉未醒「豆の秋」、南薫造「6月の日」、彫刻なし)。 受賞者は、2等賞小坂芝田ほか3名、3等賞池上秀敏ほか6名、褒状井村寛一ほか27名であった。 10・15～11・3 ヒュウザン(フェウザン)会第1回展、読売新聞社に開催(高村光太郎、斎藤与里、岸田劉生、万鉄五郎らにより結成、11月『ヒュウザン』創刊)。 12・11 洋画の先覚者、安藤伸太郎没(享年52)。 この年 ▷ 石井柏亭・児島虎次郎・斎藤豊作らが帰国。 ▷ 後期印象派の紹介依然盛ん。	

京	都	府
<p>田隣齋)、9月しをん(山田耕雲)、10月楓(井口華秋)、11月霧(川村曼舟)、12月月霄(阿部春峰)。 日出 4・30</p> <p>5・17~19 仮面会(ル・マスク)第2回展、京都青年会館階上に開催(なお同会はこの年をもって解散、出品作品、「紺屋の裏」「棕櫚」「学校」小野竹橋、「冬」「玉乗の子供の顔」「蔵」「女」土田麦仙、「麦畑」「牡丹」「習作2点」「郊外」「村」田中善之助、「潮」「北船木」「庭」「河岸」「さつき」「朝」黒田重太郎、「志摩」新井謹也)。 美術新報 明45・6、京都洋画の黎明期</p> <p>5・19 栖鳳塾研究会(出品46点、井口華秋、中居曠谷、森月城、東原方仙が批評員、1等「鶴」西村五雲、2等「密柑畑」井口華秋、「美人」上村松園)。 日出 5・23</p> <p>5・25~26 洋画家 西川純、個展を裏寺町妙心寺に開催。 美術新報 明45・7</p> <p>5・一 黒田天外主幹の雑誌『日本美術と工藝』第6号をもって廃刊(黒田天外、以後美術界から隠退、5・17醜翻に移住)。 日出 5・5</p> <p>5・一 川端玉章の後任として東京美術学校校長正木道彦、竹内栖鳳を教授に勧誘したが辞退。 絵画叢誌 381</p> <p>5・一 安井曾太郎、福見尚文と共にヴェトイコに制作旅行(夏には英国、オランダ、ベルギーを回遊、秋には長谷川昇、沢部清五郎とスペインに見学旅行、作品「青天壺」「少女」「肖像」「巴里の緑月」など)。 日本美術年鑑 昭31</p> <p>6・1~3 遊陶園および京漆園、合同して陶器蒔絵品特別展を東京農商務省商品陳列館に開催。 美術新報 明45・7</p> <p>6・1~5 京都高島屋呉服店、風俗画展を開催(新築落成記念のため、三都画家の揮毫による美人画を陳列。春挙「芸妓」、松園「つめびき」、翠嶂「女役者」、華香「寒山拾得」、特陳栖鳳「あれ夕立に」)。 同上</p> <p>6・5~12 グリンハウスの小芸術品展、押小路御幸町西入ル、西川生花洋草店階上に開催(長原止水、富本憲吉、津田青楓、斎藤与里、小川千甕らの小芸術品を展観)。 日出 6・5、同上</p> <p>6・10 京都美術協会総会、京都倶楽部に開催(内藤湖南の美術講演がある)。 日出 6・12</p> <p>6・22~23 山元塾の青年画家7名北斗会を組織し寺町仏光寺上ル空也寺に開催。 日出 6・20</p> <p>7・3~4 後素協会小品画展覧会、五条倶楽部に開催。 日出 6・21</p> <p>9・10 原在泉、宮内省より東京の田中美成と</p>	<p>ともに大喪儀齒簿および御調度品図写を囑託さる。 日出 9・12</p> <p>9・21 田村宗立、昨冬来より揮毫中の建仁寺大小方丈の壁画・襖絵を完成、よってこの日考妣追法要を営む(〔方丈〕「十六羅漢海陸の供養を受ける図」〔小方丈〕「波浪」〔茶室〕「唐子遊」「布袋の観月」など、また宗立の近作十六羅漢その他の仏画も陳列、22、23日に一般公開)。 日出 9・22</p> <p>9・28~29 丙午画会、裏寺町妙心寺に開催(海老名長紅「美人画」、川畑春翠「桃山の梅」、徳永鶴泉「日の出と月影」、芝千秋「五位鷲と船」など)。 日出 9・27</p> <p>9・一 平野英叟英青堂、平安神宮貴賓室前橋廊屋上におく鳳凰を铸造。 日出 9・3</p> <p>10・10~11・9 関西美術会洋画展、岡崎勸業館に開催。 京都美術 26</p> <p>10・13~11・17 第6回文展⁽²⁾(土田麦隠「島の女」などが評判となる。1科では水田竹圃「溪山滴水」など)。 日本芸術院史</p> <p>11・23~12・2 竹久夢二作品展、府立図書館楼上に開催(第1室は専ら少年少女のために制作した子供向きの作品にて「少年の春」「猿蟹合戦」などがある。第2室は水墨彩色画31点、第3室は「酒蔵」「奈良の壁」「鴨」など57点、第4室ペン画、墨画など24点を陳列。第1回個展)。 京都美術 26、第1回夢二作品展目録</p> <p>11・11~12 競美・佳都美両会、展覧会を南禅寺金地院に開催。 京都美術 26</p> <p>11・一 市勸業館が殖産興業または公益に応じる利用施設として岡崎公園に建設完成する(本館には第1・第2の両館があり、毎年博覧会・各共進会・見本市などが開催される。第1館は大札記念京都美術館とするため昭7取りこわされ、また第2館は昭9・9の台風災害で倒壊。昭12・10再建される)。 市制史上</p> <p>11・一 竹内栖鳳、大阪高島屋美術部開設1周年記念展に「群鴉」四曲屏風出品。 日本美術年鑑</p> <p>12・一 3代川島甚兵衛、「富士巻狩の図壁掛」の大作を発表。 川島家と其事業</p> <p>12・一 競美会および佳都美会、合併して佳都美会と改称。 日出 12・6</p> <p>この年</p> <p>▷ 内海吉堂、「船過孟浪梯」を描く。落款</p> <p>▷ 春、前川千帆、上京。北沢楽天の東京パックス社に入社(この頃から本格的に漫画にとりくむ)。 日本美術年鑑 昭36</p> <p>▷ 陶工 初代浮田楽徳没(享年82)。 京都工芸大観</p>	

参	考	日	本
<p>光瑤、「漁夫」玉舎春輝、「年に早し」岡本蕉雨、「白雨」広江霞舟、「青瓢」梅景香雪、「春雨の夕」・「冬の夜ふけ」不動立山、「湖畔の春」柴田晩葉、「鶯、桃の節句」松村梅叟、「南国の一隅に於る曲と眠」榊原紫峰、「板塀際」合田一峰、「売牛」広田百豊、「茶の香」小西長広</p> <p>第2部洋画</p> <p>「野路ゆく人」跡見泰、「糺の森」河合新蔵、「朝市」寺松国太郎、「尾の道」黒田重太郎</p> <p>第3部彫刻</p> <p>「清韻」(木彫)石本曉海。 絵画叢誌 306</p>			
<p>▷ 沢田宗山、朝鮮古美術研究のため朝鮮にわたる(李王家の宝物などを拝観、帰国後そのスケッチの一部を『朝鮮陶磁器集』として発行)。 京都工芸大観</p> <p>この年ごろ</p> <p>▷ 明治末期、稲畑氏庭園完成(藪之内紹智(透月齋、号竹窓)設計、築山林泉庭)。 京都の明治文化財</p> <p>▷ 陶工 道林俊正、金沢から入洛、在住。 定本九谷</p> <p>▷ 友禅模様、黒色に鼠のいわゆる「喪色」が流行。 友禅の変遷</p> <p>▷ オランダ アムステルダム万国美術博覧会出品を今尾景年、谷口香嶠、山元春挙、都路華香らに依頼(「山茶花」入江波光、「鶯」榊原紫峰)。 美 3:1</p> <p>▷ 鶴巻鶴一、鵝縷を改良(従来は筒にて模様を臘線を描いていたのを模様全部を臘で伏せて線を抜く新案を完成)。 宮崎友禅齋と近世の模様染</p> <p>▷ 関西美術院、理学士川村多実に解剖学臨時講座を囑託。 関西美術院歴史概要</p> <p>▷ 高橋才治郎、六道珍皇寺の梵鐘を製作。 京都の明治文化財</p>			